扶桑拾葉集 十二

太政官文庫
和書門 類
三二三四五 號
函
架
三五 冊

内閣文庫
和書 類
三二三四五 號
三五 冊
二四函
六架

内閣文庫
番號 和 32345
冊數 35（12）
函號 204 143

212

共卅五

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

閣乙1之

扶桑拾葉集巻第十二

目録

うたゝね　阿仏
庭のをしへ（或曰乳母文）　同
権大納言為家卿へつかはしける文　同
いさよひの記　同
清女集序　藤原雅有
野もりのかゝみ序　源有房
源氏論義序　源具顕

內閣文庫

同跋　　　　同

扶桑拾葉集巻第十二

参議従三位兼行右近衛権中将源朝臣光圀編集

うきくね　　　　汀伸

もの思ひに事なくくるしむ身はあるかひもあらね
ばよはれるとも覚えおもひけり月の光のあかり
らいふぬれ衣きせいの清まして、わかき事て
身のむかしにかへりしみじみおほえ侍り庭の花ちれ
寝ざめはなに出の日をも待ちくらし人にもいひさ
思ひむすぼれおもひわすれて心乱れ思ふ
おもしろさ紙にもかきくどきてかうしかつゆくされ

とおもひつゝくるにさしもあるまし御事くらふれはわか世
御契の程をたにしくしくと思ひ給へんと我心
のゝ給ふくるとくらし給ふかわたら夏さらつ世を
まれにさうかし有の御ひわかれしりまちなかの経
なかにとゝくもにはうらにかさすはむ打あしれ
萋れ出ひらに一夜つゝかつもとなしいのくなしれ
覚つかなき物にかひらは紙ほそうのみ思ひ給へるを
年の経くしらぬかしとわかる道にもあらすあふをかきりに
へたゝりゆかんもさためなき世にやかてわかるへきかとてにも
あやうくかへしうもひりは御つ雲のとゝてな
おりひさつるさわたろ身つくなおつされ林のつ緒

のゝ紀有りきてら雪て給はりとへにれ
あさきめのなりつたれはかのつくつれしい有
さていかうしめもあをもとすくるのひ
こゝにはくしか者く御しくつもいかうへに
多み世ねは宮に今はしとつかいものゝたとそ
ねしひさて秋つかはしとふにあえなさつへつゝえ
あつましみうけゝかりとみなみもつとれもに
かくふかさけうちなかゝはしも宮母して秋か
月かけもすみぬ御りとあ中すくはれになり
かゝその宮しきいいとも袖のいとゆかれにくら
して思ひ御しのつかうつれと思えそおもて御

あかつきつのれゐすゝね白うとりの色くらう
もいまはかくまて地もとおりひとゝめゆくのん
おもふ我おもへゆく人てもありすぐしつゝを
ほかにはせめてあくかれんもまれなりやふ
てらふるゆゑさりゆきてさんせになりひ立
めつもさうふいとはやしつゝ俳のはつのゆくえ
つらうれとゝ姫はようちゆへうち我めしうれ。
とくれて夜ふかしさらしてかつつうちてや
まちもられ色こゝえんとやかむ。きく
侍みへはともなかう人々時雨し色し。
なやうえりゆくへたゞいへとらうめとは我はい

うれいはかりしかくらんとりけるにかりなん心に
ころせさらかしみえくいとおすころされいらは
くそてりけりねむらんのつまなりいゝて人下をり
かくらにはそはこそれいはことに我みてて見
えくさまくそろ枝かにそはつよはちうら何紀
してひとゝ雨ゆかうてしいに御くさしいふく
わきを我かうやとみゆにうち我をおさしれ
風さへゆくものさひしくあうされいみさ須
やすむるに何殺
人しれぬをちこちかしたつにしの葦代
いのちし御覧とゆかさはさみしと

やみりひつくろふよとしたまへくさいさかゆきれてと
きよの法のうちすゝんりし侍てしいてうく
それはゝらやうところをはし法あことよて
つれよりしよちさくにてひかさひかうすれ
しかくに御のをれあるれていひかれとこゝろ
ともえくゝこ御やりまかさうされたらことはさ
筆のなかれし、いとみとこちあかれしまいまかなく
かさみさとうろ御ひかりにこの葉のつゝまく
見えぬかのまゝ花浄へつきしいうしかのえ候ん
あこつきしいと口はうくてこの法文はけしく
世みつかし目法のつゝさたみなとすれわうし

へたるさなれ給ひし御くすらとうれく
たれやさきこのうすきれとく
すゝしくはうゝあのあくさ法あて
まいの人しれとおのみち法ひとみくさ
あそくしくはゆかやをてうち悲のある人皆
しあ色りかまそてつさせ法華の御ゆちさま
し侍く殊とえんとおほれ多く身こいかく
弥留あさくのことせさうへり多くあかう月あか
てぬまてりちりにうつれとしさくいはれ
いつはうまうんうりて、御あさありをかく
われけし神の御あていとくかはらう御しくて衣

やかしておはしまひつれはなりとちかて、まいりの
ならひもしくてをるかはいとめつらしかな色もく
宮のみちなんしさすかこみとろてよそし光
こよなう月ころもうひ給へなるつみをは
まきえてそ給へりとれなとものかしのまにせ
てりや、ゆくかともかしたとつかすふへいひしま
なりふつてさきしもおほゆしてか、田は花
とかはふうのまかりしまてゆえんこ、よりまたう
たうけらひのおこりし、てもらしきなし
うちまゆれせ、あまりしまうろれかそかう
く書ときんとすて、目うと御かうせさと、

うれしくをせしろかうし給ける、はかるき
よのおもくおもこし、こゆう書らえあてせまく
みとあれは、まいのうちめつかしの博りのひく
ことは、人し役をそめをとうくはしおもへて
あくましくよのつなうにあるなすの乃れ
ゆくさつるてい、まちまうそえんせもえんと
御はそくかうつくらめし、はうもしまうれ
御すなましうかうらかあれとのうせかうは
こゆへなひしとをたゆすぬと、かひはく
くなてつはらのまくしやうくすうせ
されかこよひ、つまれくくやみるましみと

思ひをよせてまいのまつりをすきさゐる
くらつのめつてりしさすかをあく八らく渡
こゝ母しらつこりからぬちつさにならくれまや
ひやうの事うらみく成楽くつ事ろれまし
うらめくおもひあつひゆちうろくいつまりねよ
おやとしもくりい事ぬりしむられわりつもまし
ころは月はいつしくあくゑれきこえもしくるぬ
るたらしてをいゝのおそれのこゝろもれ
ひまなちからしがつひらのころやに
ゆを回よらひいてろてりいうさしこゝ回
人のゆさゆうとるりひて不りしゝ宮候とも立

しらん人は内せうの楽けしきさとしとのねひか
あるとなしひのくさゐちをもちはおもふらよ思ひ
いまはくさすまねはしいつるり思
やとらはやつくおもひほくらかまいつし
きこゆるをねわわしてをみをなか給ゆき
りたるくしも風もいそゞさ御しき白い
とらくわろしまはして人ニ三人いつわ
あらく給ひりめもするてしりしてくり実も
しても人をみる程の事しも霧もまとろれる
やとりあこゝいまくみるてとひまいあらはれ
つきはり月のでたくもいさくをはすりりかいゝつれ

らうしちりに白うさきけれはのうすこゆるなる。
七日の月すゝかはなるに、おれのりけりさしよひ
うつしゆゑみえいつろふ。おはすれおはしまさはべるら
なるゆけさうなはしをすりおろし御ゆかさうま
てんじむひさうつらをろて。まいりにくる
を渡りて月はのきしみてとして。仏まいしの御まへ
給けりしやせおほゆるりけりつりしくもなれし
さくしすりのへさりは月白てりそへあかしのゝめ
なにちりもせはいはせしなうこしのまき
れいはせしやかおもえてやすみとおとりよるひ
そうわりんはつきめりてなし花のさうし

まやとうれしうりくろ。今てしもかはおはひ
すりかしをとうえてえなりかしきなしゆか
うりくろ。まうのしやうれろりて行とおくつを
つまよろりすりひりかりんこなとやつてうあは
つゆてもかの文としんかりいてくきれをむ
めうえれあつきそめしくさしめとうてかに草
うれをつりまでおりくしりあそれさりはの
乃にはしく紙からと宝てかのえこうりし宝
あことのつもりあくらはとも。今あゆとみるた
あろ行つさうおゐのてりつゝゆつはとしも
めらて御りのんうしと紫ゆりはとてしこ

かされけるをこゝにてひさしくとまりしく西おもふる
ふはなりともりけりかく日暮まて人ゝとて就くて
色しくへらをたちぬおもむつゝもせむやまれと。
せめ申の内ぬかましはおもそ語しられいかへりみん
こゝにして御し給ふ人ゝみな行かまく袖入
めぐみやとゝとへつゝおもはるゝし火の光も
てんぼう書えたりつゝ人めやおしろんせゆく
ふくおかう語しくされしみく見やしてむとへと人
申そくる后とところにすれはひろかやうかへり
ふかきこきこれ御さきよの御とれくあまさかる
ていとう行しくそよりて故川やらかはしたさ

とかく語かうろしつうるも宮らぞれかをつしむ宮
まいこれ御さよこらつれくらにとにけしく又
みしもとくきそうしてとんこすゝほとかりつる
あやうくにくさ火のひかれなる旅かのつきこ
ゆうて文のにはくろそもてかれ御さをさゝくるを
ふうらかくつうてうゆうとりしせてくれおそて
あやうみ侍なしつくとあかうふら出かうてれく
うろぬ何とうかおもむ事とうにつくれと給か
かせもふせれひらうまれは筆のあらうともを
えては
悔
あさきにつけあはれなるやうさせぬきことに

さらは伊よりんなりとせらぬしく侍
御くさしか事てんせいかしひろうまや・みみく今
しいてゆくへさあちらしてやとまち候いは宰
るれいづこもうも流れ月すにて了・あゆく言
ま人あらかさかりて・ことものおさ給しうをと
らさて了。哀も田こぬりにて了と氏共人は人わ
志と井へはけくろぬしじつてこまぬよろま
かくそも人やきつきられんとそうせう給宰
れいごとの案てうつうとくぬしぬれとかくて
らわら人てりみしろくさ多すせてさんしくて
世のある人に哀あくかとぬ所事て多いつもな

らひすうされのすれやと給人しきれとまろう。
こしひもとこてあ事てかおのらぬせもされ、
さらはんさを道しこらくしくしわかえ涙。
あしたことたれ、けしを書くられぬすとふ
雨すれの人かし家うに。木の葉ちたうけは
つきて夏のやしてみえにてしらぬ給共く
ひとわちてちいとつてけやうくしぬおそ
ろうりそうらく人のさしこうかなましにお
やしくしぬるかとこすくちてのし。と色
てらつのそしいせかえをさてし系のここ
ろめしられぬりしあれいこ也けるかう如了

しかのなくをきゝつゝあはれにおもひまよ
ひゆくほどにかくてとある宮の御まへにわ
さうれうなるさかまでのぼせしに人のむかしを
すこきつゝほとに道すれはさはつまれくいつく
ぬ楽もやかくかゝしほとかとまみるあはれ
しかちゆく人もなくさしかゝるとおやしとかの
めら人もあれはしのびつゝしゆくはうしとて
まこれ世をいのはうはかけはえんの一とら
ようにむねしそつゝ何すれはおほしのゆくま
ゐかもくとやらすくへうんとゝらもやを
こゑまでうらしくるへうきにこともしぬて

うちすりつゝかへらしは山の内りしてまちうけ
く祇園ゆくしたる内の内よりてしらうへんの山
とられは雲のつくへとをたく林をかくぬ雪
てゆくさにもみえとかなうしてかうらへんの
まへすたみれとしそてはらう木内しひ出嵐て
すゐところすうやおもしうくぬ舎しらぬて今
うかはけそくりかしこくこともかさららを濯
のあかさへゆうらひくだしくいさたえ見
えにかてあしつつけしくらをいましちらて
こゆはすあいくらすれは頃のかれとゆうさう
ことの伴像の御もとちえゆうはく内くる

ゝ申けるそれハ松か崎あたりくしたと、
れかりし人ゆめにそれしらやこれハうくよりさ
こゆかえりくこれハさめさせて何をつくら
女ありきこむくこれかのしこ思ひ給ひの
くらうすりをなかこ給やうつれ何と君人
みんとみゆめてうゆめくあまとてう何ゆゑま
つまそこれをきまひ人をいかにうゆまへハ人
かやてまつく給うゆきくらゐみんなをしかり
まつのかきつのすまゆへこまて田ゆわけそよ
ぬら給くこれ山の人ハつく給ゆきけこつく
よりきつつ給ひしておもくすりをかりやしく

こゝへつかはしけるゆめのちくはうくゆれ
すかしてゆかふつせおほしくこゝろうるはし
つまうけれかりうなくちこそありてゆめ給
つかさ申候あるかのこれのち給むを人はつすへ
あさあり候まくらろんとうやとせとなゆ
たいまめことなりてこれや田乃おくてうあり
かへさちもあつらく候田くいてつれはとかり
とおいひうしくらさへまいひてうてとも
ゆわえをりさんしそてらとちのへさん地さ
色をれのからまよりゆきうやなかしくそれ
けりまでみうり名まいひてんやせつ色々

いよ／＼いとをかしうてまはひ人〳〵みち
ひくおほけれは御覧させ給仏の御ためにとて人々ゆゑと
まそうれしくあはれなるわさなり目もたく
とりつゝ宮くうへり宮ますらもうるさくかて
すゝりやしくもれらるゝもあはれさ御かな
御ことおほらく人ゆゑなるかくれとも、いか
れさし人の御さまはとまる御こゝろ
とふかあつくをるかくらはいはゝ人のうちち
すりけるにはゆゑしとうらやましかりしすちそく
かゝもうせて宮へもかさしくあはれとも。
いふものまてぬしるわりはなやさ人々か

まひの御つまゝみゑゝなゐまかさせて三月
なかはゝおほかくなさつりしふも日よひか
ことをみつゝは一まらてうちいそしくそひおり
ねさてはおほえなゝたは世おほかく御さてるに
あらそわしてすゝくおほふさ御おりのまことひな
秋よの御さまうちはひあり月のあかことた
らは家かゝこまかせまいのとなりはすくより
さそもそゝろまつとも宮もとし月はつらく
御ねところまてやとおほしうはつゝませ御しこ
おもひうつるをかみをゆかちらしくろ御かさ
せねあしもせまに花をえりすしけるとせいかせ三

まいりゐるあの頃とて宮にすしひあしのとしてはせも
う宮也こし月の宮くえつゝあへしゆさんれ平井
わかのうらの道のちう人しれすうりまう
とこゑいつてやしれこやまの月すこしあ
ふかれとよかくて慰まゝりさん
世さればゆくてうしはとのこゝすひらふつてそ
くじらんとあり供あくりれうまれまさ
田しよのあゆかしめしすゝめのへくだおもひのかうま
さもとゆ百月れゆく点とぞそのつりあなゆひしり
むつ内すはてりしてあ桜はあれ世乃慶の事
あ宮はてかあるとあとくくぬやまさらさ

あさゝむかしは東は田よりひとおもくましてせめ
てかすられど、ゆかしけろとして、花にひかすれわし
桜ふくれのみいつかつゝらひく、ひとくさすね根も
あ宮はてゝせはやうこくたにはしよのくら従らへい
水らさきはせのつゝひろのりあふかやとて。
人しれとりさなりせし、伊とくしくさみこゝやよ
ゆしまうん、こゝやとのつゝやかくさはとのさけと
とそてねあ宮はあそれつりかと、やかくまちつゝろ。
この葉しあつしかし世、君の、のりとまつきく。
えあまてしなりへく、くかはしは世の人のつゝさい
それつりまへすひとてよりてことをあつゝや同し

せしもかえぬまでに御心ごとなきそゑにちか
のみやの御もとにはひすこしやうらして
　今ちかきれつゐのつし御こゝろにかなへく
　ちゝ宮にかりしたまふこと宮はうね
日ころみ侍るある死れならうにおもひたまふる所。
中むけく東れの宮ゆのつたつるに御ゆあるくすか
おもうにいへしをとけやかくするからうはれて。
つましういけるとてつきしかとちくたちに門のまへの
れさらにあれ御さうるやうにおはしまさてさうらうてち
をうみをこつのかしたかうあらんにに門にまうれお
あそしふ人へしれをすこと宮しう事ねとも

いまのやうはおかしく
　おほいとのかしこまりきこえさせたまふを
　うこんせうしやう宮にて中門まで
あそんの座にこれ御前のまへにすゝみつゝひき
うちこへそろまうそうしこそはさとかはりや
　ようこそまたおほいとのゝまへにさ宮ふに流
　うちしうらみそれぬしもめし
とのゝうちのに弁てしるとてもわかうなし
きこゆるをみつかしくおもひてはしさうにたまひ
おもはしれこれんさうへさつるてもなくていのう
み御覧ことにせをねしてたへなさりまかることてまれ

なれはよついせんかうくて
　こゝえゝそんなつまれのらせんすなさま
ともあゝ見て、ねん人のもとかへしく
と茶ゆ紙とあつ派れ申はあるもて、なうしつて
わかのこと、ひつゝや、こはれ他さいすゝねこといつ
つゝそ、今はあやうにほとめつ、とやうすゝそくかく
もすりみてむうちつかうんなれは、むかしひう字宮
なおそて、ぞ、にのあうに西てて、そうつうにや屋
つゝすとめつゝ、あゝうひうひみんとと、かくとるあやの
さ世まりしそれとと、使ゝてりをこけやしくて、ゝ
そくいかと成ゝ、こゝつ、かすしゝ、にもゝ他うろ

とう国あうゝ、にとるやうにおひくこゝんかにしと
おちそくみ給うくと、を給うつまかしとめそて先
そと名れと、う代人を御とうゝみゆうゆう人なり
そうゝ、りしうにをおさんるを海ま、へうもあう孫
そ、かくとはおゆしまうさうわと、終うて、本
まの中とうしくぞしもすかんちしなうゝ。
今一まひ飛れといつりも見えとくりゆゆかうこ、と
うれしてゝおされみていかくもし〇きけしう
すれつ、あこゝうくのさへりあをはたと。
いとれたうくりとうちさうの所へりゆきさりさ
まれそ、のおくゆうつあまりともわやしくえ

くる宮かりの所の月かけみれそへいかにかしらむ
まへあそふへくてあそひ深きことありつれは宮のかへし
たはむれふかへくなりくうるし宵
わかきへこそしまされはおやしくそかし
さらぬほとおもふ乃をとこてさまさしひかりうち
あしきわれともすくしも好まれ
人のすれれうた恋の草枕
旅ふてそすゝらたゝ旅乃夜
日比わかれと同し空人にありしかはそたまへ
こゝやうにやてゝおもふれは中そきめり
きこえいなりなれ世にいふかうりとあかとさ

とおもふく思ひ川にそへてうかふ世の哀をも
此の川かしおもひいさよひ出たりけり今
日かすかきりて人はそのき命なりけり卯月よ
しるらめいさよひの月かけ出てゝ猶なかよ
宮乃おもひそへ川をのこれる涙つゝくと
すゝめ出すれはてうるうきすゝ悟りておもふり
御とかおかふ月影にこゝろかゝりあまたあそく
すゝ涙
とく露の命なれはまのかれはかゝく
いはそくてもやよか月かけ
いはく ふかゝあかりんとすゝふ笛の音乃きあそへく

れいの御前ありしまゝりしけしき御よひすな
あつらもれむねゝきさむしよみくられたるら
まられと
御かへし敬里さうたにこそわらし
人をこえてまつひやいかなれ
さても程ふるりまへたらいのちぬらなり
皆かれてやうくくらいとこそ侍れ
いすりかるとまてしかやまくまさ敬
かりきちくみまのかもいりすむ本もあさ
み・めらの小も川ゆくこよいされゆめ
消えりさるるへしとおりひさや

露のつみちのの庵に濡ちよ
なみよあらうたちつすすくたらく旅寝もて
あらぬなすみよおもひのうすもとうやむそ
わらよきさむさぬ青涙やちらにきりくと
のうしみぬゝさまてむとうさよぬ涙ゆめ
ぬりよほしおれて礎りせむうらそ
しみぬうすりりと友とくあくなゝと
まりもさなつくたたをぬなさみれし
はくもぬとうつ雨りもすゝとせらく
まひさつかきるゝおは海みゆくあり
つと銀のぬとよすりあらぬなとどう涙

はのみやとうきやうのむ宮さへたとりもなく
しられ給ふことゝもおほかるやうやきこえて
たえ給ふなとゝわすれやこれそのまゝ
てきんよくはかりなたかり。いかめてたく
おもやうすかたのうつくしさはとまうすもつゆあく
なりかくてはくくしこれをきんちりはねる
のすゑねてこえのくすさみ給へうしか
ことはりしくてあるさまをかきそし人
たえんねてより給ふなとすみとさらゆ
くいささてこさすゑとえさりあり
たまふれなんこやゑのなかりもいひくとも

なんにかゝかゝゐかゝくみゆかゝつけられ
けておほかたまゐるほとゝもむとなれは
すてとふらひとすれはよりや
こあやしくおほゆるに人たに月に
もなりぬ。秋つくるやことゝ出すんとなり
けり。ころは神無月の廿日あまりの
ほとに、おほきなるもしとふかきほそ
くろきのとゝ見えて、いとしくもみし
みとゆれ人はそもたり。人たこれたき
さんきに人しれは人くもいはりくて
いとさひしゆかりの中のゆりもこそ

今はかりてまそあらのほとなよよのことなれは
うれしと、さりしくこゝろのへきみてあまりね
て、出られみちとうれしうたくさと流
のこゝちよりきらくへくゆくうらすし
きこしめすにもきまよ思してこそ見ゆれ。
ほとすくなみさらにけりもありぬれと、とく
ゆかし世なの清みして、きこえはなみぬと
はみなりはつきたく
　おほえわたれはあふ坂山のせきのわたりは
　ほとなれはさへなく瀬よりこえ
あつまの道ぢなとりつゝより。夜ふかき宮

あり出給ふ。こゝやことは山なとの人々見えは、嵐の
うれしさあまり見えれ。思ふてよくて
おなくりのかくかく、何とく御りいそきけれ
やくをさしれこと、ねもしるとよとてゆかくと
給のこゝろもなきあり
　思み侍くことも給ふふをて
　きてもなくやしき旅衣を
みちのわたり見えたらす前ておほつかなきにこそ
といつくくとてすくなくきみへてきみへける
まれん。いつくれ、はや山てもみえくとゆく
とこゆやちらし、人の給へり御をせて。

なりとゐよるやうそ日りかゆかまでく、
さすらひ給ふ御身のはかなりたとへん
かたなかりけれ。されどもなほみれ
ばさりのさうひようすけ殿をたのみてとや
かくとたのみしに、けふりゆうさへ
の人なかりけて、母とやはらともしくれ
かと、かくおもひをとりかへしけり。さて
かくたかきつらしきあひうらがへり
あめさらくへこさんとれまさうとそてもれとぞ
ともやるときもうつれかし、何のさかさ
はりあへくつくしとおもひかさと見えれは御まきと成

吉川のやとをも、ひつりしをたよりをのしるしとも成ぬ
よそまいれおとするおそ、何事にかゆゝしく
おほきにうはく、おもひはなほたくましいまはと次
るりも、見たき君ともおぼえろしきにかゝる
まう祭どもさうつうそそくねまそいとこゝや
このころたつるよし挑いたらりゆくらんと挑も
姫よいいはくおみさおもちゝ南りてまつりのひゞく
うつりんほぐぞそゝよきつねんりとなさけにとき
つれ日うもつやとめふふさゆう人てかり
東成おはたいのめく底しきてともさまく
なす給せすみさうそえを絹くしとふ

へこさこやこころもみえに
おもひいてく名残のこゝしふ歌よめる
かくなきさ院よ淀やわたりの橋し
はなりたる楽くいおほきたち川尻を出し。
かうみのうらまちのかさ事よこうを
ろかりもおもしろくぞ雨よ色むしりくよ
とひそうりてなまのまつさふゆしふ里
りかれ去やうまくり此おもひくよ地と
たてそうるすりるゆゑも。見達車とめつし
きゆらするりも。とふまたく病やと
はるかによもうらくらしうる男たまうましゅく。

世。人しまねんの中比をはましくらしくて
あれやさいうよたすうみのうらみまいはい
れよふりてよいとをさきめうつ舞
みうえ此西八ちしと云所見まて。き里ても
ひよしふいねうくとたちぬうや。たしもて
ひろう我みゆる。めさつきこ我ほの秋雨を
こさしか世とも。あそうの第も見れの事を
我はたまいりや。そいれとと見ゆる草木もな
し。たまを飛うのあ我んのそる。くとされを
なりけさきんもとうおうゆまとはましあ
きくしやされてさ我んとおとこしなてく

なりねば。こやこかゐたらうよめりねまえく。
かのくよのゆよもありね。たまれはのうえ
おもしろきところなりけり。波はうさ志
かの海路のとうめるれうみれおちいてるを
ちめよきるくとおひつきうる松のころき
ちらまと。絵いめ海かしくそみゆか。松ち
はまえとしろのさ海とみれて。ちゝうしとふ
そこうをまろうめるい忘ねとものたまふい。
これめしかや風をあとさいりよせたうう
舟とたれきをなまれあしそうまめくしまと
ひをまるつてこしかもをと海るへ皇を

ひうそが。の我めたまとさしよこやをわうや
まとれふよいか。かくてしをなりくかしを
あうねさ海をり。うしろくまりたる経さて。
まへりい鞍をさめる河のさうふたすう揚り。
うみいてちうさきれて。見るとのあとこそりを
かきこえて。志木のなさすとれてこれ河
のねさうさ海小あう経やうふ見ゆるをと。
さ海ふそりていはをおりしきさ海た主を。
いうめるようんとまし。日うてゐまうか
こやこのかさのとゐしく。ひきいゑめかす
りあうめよるい秋をう経りのとめとれひ

つくるかひ世のすゑはみえまくの
ちよに物かくる程になりいかなしんも
夢のうちひちたえ果ぬへし
ちゝろうの絶かおつひわよなきよも
ゆめゆふにゆかをたれさりしちつうすて
姫君の山ともえくあるしと御世みゆかの宮
いと心うくてんにふ物しく風よたしひく螺
君の御心をゆめのまへよあへ絶なまこと
うへ給をかくとかひきりつこうの御まを
そをれおもひけるしかりけるうひのちか程
をいと心うくみえさせれるをかくてにし

月の音あきにはすこしにとたりぬ都のきより
を姫君との あまこあるとみえまうし、いとおし
なくよりけくてみへし人たちれくもみえそて
らまてあろほそろ川るおもひよろま
ひよたりくあるふふたりなれの しとうら
のあとれよりふかをつきてくおこ錦かる
織ろうよおくれりかなしくてよろ川を
ことをまてくいそをのかりはんとあるいへ
れおもらんとくものさかりしくかつかい
かきまてくよかくりきそへと こち
もせよれん、ふそのふい物ともり、そみち

もいとこほりとりてざくらまうちよお
やうかへきど。たいまくゆくしきざう
ちぎふ人もなくて見えず。あくらむろ
人をおほりあまきて。おもひもゆく祢の
をゆかくとぞえろ人をんくろしくとく。
さをまくこさうのともゆくと。たまうれとさ
きあそてのかはへまよ人りぬ。いてうれ
なれことふうくりおもひもをかし事
ゆく。かよと文をやうくかくらんやあちき
ゆくをのうし。うてとても文きしはくらん
事をかこなれく。をのこよかとつま都は

かれちゝをあはれにうちかはをとよ
をのむつゝしきまて絵のくさまゆん。
は祢とよりおはれたりし絵のあはく
しさゝのなかりしかしきりつまれを。
きてそめきらんいさちうふん。ほうく車。人見
まくならをちいほくかさはくれしあるや
きたかいやとうてなかかうは
かそのなりけくさのとくらかりしは
まくおゝくかうてかうしてそのはかれ
かのかひきて。人をくれうんはつれしゐ
ところゆくゆくかりれてうまいてなく日

うとれもくるし。定家卿しるたるともうちやすく
なるのんめりて。おもひなかて。こくやれしかなる
くれ作きうすく。なあひのはしもえひしてまさく
れとは地してきね日ともうちれつなくく。なくこ
あり大をおやうる所。なくの世に入かりて。ゆ
おうて御りなかうるり。心ぬさへまりつとく
ぬさ雲よりにくれぬまいは。関屋ちくくなみらや
そらひうるみぜにりうさむまつしうるにたとく
ちぎりふくく。かかとうなもうえん地みかしなう
宮しさもいてき給しくて
かなくに宮まいれたゝしまい給す

やうそさしむうぬされさにもうさ
京に入日しをはるかなりいふかてかくみのちに
そりらくみゆるか所。くそりしなりさこれ給
あさ身をあらぬりつくなかさしうかしこ。心ひ
伊勢の
これなひそくもていなすれうしそやま
人とうやこれちうぢあり給をそ
かくおもひつらけれと。西とうりかのへとさやて
もちにんれこもかみきは。はけら所さそうり
地おもひへとうて。御さうにくてそ人他しそる。
日さるか御てう。あえゆしくされておろさ

そゝかしからかられて。いつくよりしるへかあまい。
ひとのおもひやひえにもあまり侍りしにあはれ
すくみ。むすほゝれくしるへなつかしくそすゝめ

すこしはしをもぬるらめやかよふらん
こやこれやよしかへるなさけくて

くれくはけふかしくりゆきつくるれはたかすもひか
しりや。あとをうしろことに行あきまよりおもひ
ちゝまことろくをわかれるかさ由めしきあはく
んらくまゝへくもあかわたるやるとは心ほと
あれまつ事あそやうにみんむすゝ行ま
みるもあかれなり。たゞ人ゝもとらうえてぞよ

すみそこあさ由りみゆかし。に心ゆかされ
しかゝしまてたゝこそしかあるれとはさう
とそれらく心にほかりはくれへし。
かくけくめりやはりしかくるしらそ
由り。かみる色さ深くそもとに心はに世成
をあすひしつしれし。志てしちおもちたれと
又すらをゆかれそつ
見れしめそひしかうへこにはすれし
あのし思人をあらされとやし

庭のをしへ　或曰乳母文

同

おほえ此事のよしあしをもはけしくとかれん
らんまうさき。ことも思ひとりて御身は
さてそのかしひしふかきのうちあくよなり
ぬ色くい事のさやて数ましとかはれてかく
らうかきそれよりふ六此佛よ又ぬいさ先へしめと
しみしれとまゐらせ。あまりわふいてあくとらはい
ら候えてもを。そそまふ松りしめしれらんく。
けんくしうそちうにはしのかりひとつふな
くるしやことよらさる六とし面守とかきともまいらす。
魚れなまる御のくさやくゑふ。くりそふ松のなして
おぬいかにみ此名をとてめしくまいらせ候

候まれんかくら。又御けしめしなをきてこゝゐ
らうんともおすみて。かりひらつけんて。ふ御り
物うくうれなりて出ころこいふもとそちふ
あまりさへれのすもひしわ。ころころとこゑの
ことかりひとつまくさてを候うこちなりしくは。
いふもとかりしひさくまいあすりそてんなりとまし
ふかり小も御ふんくしをへてまいらせくもと候ほどを
つまあるまん人すまもかはしまたあるとく。御つ
しいまれくみすてる猫くとれりんはしく候し
とめうれくぬりしくをやしてこせやうふかはしは
まつかく人をもんとそとんけありふふさちうへ

ゑのうせふかうしひあくとも、いへさきはらう
はかなしともいはて、こゝろすくなきそん、御心より
御ちゝ院をさへうらみふくあるやはし
やん事なきも、そのつかさ人のこゝろはきこえておほく
きそうしてめへうれん事なれは、つかうまつりけるよし
ありはやうてに人のあまた心さしのかけしらぬえ
なにれしく、とまりとけまいるのこれよりふ
あまたさわくしてそのつれはしふかりおもり
とまとけるへくも、ひくれ事しくはまさる御
まふふかくらうあさてもあしくそうつくしくは
くさぬれはふかくつらうおもひしくるしかれ

うちぬるさみしそ人の御かしこもゐのうちを、
とかゝらぬ事もなく、なにはしめ御さうしけ
世にあまてかまのすかゝふしかくし給ふ
ありしすてきの御代のはしめよりなれとを
うちまへれありとそのあくはらんきの世へ
なるて、そのえ世さかふのすゑんとまれつゝはく
給ひ、わかあまた女房のとうみく御し梅そて
あくとも、かゝる御事しかつけてもさかれさ御
をうれさりしらねさ御すくらん事ありにける心
みくえん、こさむかしひたくもみなとさみたれ
うき世をはなれし心はうたてまつるこのうそてハ珠

ましてことに人のこゝろうつくしきうへにかゝら
むく御つましくおほんあかりけるのみこゝろ給
おほしあそひしく〳〵無為のうへきこゆかつなり
みちくしくしもみつゝくゝ路れのさゝけ人
ますみたかさきれえとそあんあれをこゝろさき
とう紀のたまへ御しむのかれをもらくるゝそ〳〵ゝ
のはさゝれをもむさいはかのけらりちはすの
りよつし御せん〳〵おやまくま古今新古今
みよとの多いおほくさ撰せらし御しくてま
すゑやうしせいのうけはりめしてくしはし治
んろくしをされ思ひとくもゆくらぬかまくく

はとしれくこゝつとのこゝろんりつまくのんはて
入ぬそこらにあそくきせめつしまさくしまえん
し世はれかりし〳〵されたとん一すみこれ後
うし。さうれとはらくあたれすゆの
わそては又のはやしりすつし枝あり
のそくさへてうひくしとて七よてゝ今まで
の原まかんおはゆきそてむかせれとし
まし。文八の比やしと覚えてはまうとこうおは
河むてふ両く撰まってせ給のもとくみ治
かくおけるまれはのうそてんしりきいくく
上とれ君はしかのひく。そのか撰あそし御

かし文人といひし多かりしのまゝならずなく世
つぎのよゝまで百代までしらぬ紫とはかな
しれ世紙をもてつらねてしるしおほきをもて
ましくかし。文ある人おほくていさつらむとも
すなはち綴文しけくしれうつすよしある筆
まてはやるやうまえあれ人をきこしき御き
さりひあれ給ふみなしてもちら思ひみえ
えりつみえやんてあ諸ね給ふいらあるみ今
色ありつにもまう深きてしうすと紙ら
あふるとい諸やらもせもおる人もしむ紙あう
彩くお隔たりしりしまちなれ人りうひ

くるその紀ていにもつかくる御かりいはひる
これ文ハあさ肉しきまりそしさ御しの
人のおもくハ家からいそれ紙からとけさせ
あの御から文さりてさ人かしゝつりあもん
あまかみ物に代くらすの野の雲さんあさ
世紙の御をみ乃河すでかしれ御うれし
まろて御うあかさとしと綿しつのにさら
やうはる重中のりあやつにかのけへて
もちのりてあしらえくし紙御ふあらしれ
うきてしくしハ人てみそのきいちらくねあらく
さまれぬかずりのもさいもらく何はさとぞと

やわらかにてしらんとしてこゝろやすく人の世にまよ
まくておやまちらく侍るて何とうやりけるにいつ
おもしろきやうの人ならぶさなりみてやらんおもひね
こと代のひしかしれたゞすなはちあかなしからされ
けれども侍るをなりとへし人のあち徳はしくに松を
絶しけるにけしともかく此論さらに次は心なりの
きらにくる内をもつてえかなめのなりの生に為縁をと
うら色さえんなるをしかなりけりして人ぞまうる
えく御とおろうのこととそ聞にほにめしくへきし
乃うらむきつてくしける徳くおやのそとにてよ
あさくひくせんとさくへにてよやさしくいまそこと

代あまこと代にも聞こえくしせありしと先にこと
てらうらつゞきにし代にいるかいひおくへよきうせ
おもしろく云ふとしけりりんとくてくしくはそつけぶ
らぬ世のすくひたるものゝこし松をうまれてそくさ
こ紫ちうけりく北余乃ちのゝりにいかひらうの
生のうは世をりもなるうつさま緒りんあそれ
おとうえそくそく御身ちうくめしはいかれかの
えなきてていん事の世ありのきこえええんを
根と呂ばへてそよ遠きへ代物とアきさとされ
并八ばいは事あらし云つえ一は福とつすへきに
ろいあらそぬ事ありしふ物くありん自し

きこゆるかなし。みしはとしてり。文こ紫よりわたる
ここ兄もひて鶯はいとゝもとりうしなひて。こそ
射のみすならはんよとなひない事。山ひつそも
てさせのらんすも。さみうにあからしれ中う
御侍くそ。さしれの御ましいても御ん成ら
すひし。君のは世のくへうひくしらん清
あくゝも。おらそ文なししる。御かん追き事
そそろし。御さみすならね世のかおと成くおは
うらさうつもさてまひて後とらね殿うけれ
事ろてとも。うつけなれ君の御事としを
沖兄して。うらめし殿都。窓もつへてさい

らを経らく。二十七八よ始めと色みも出さ方
たえく人は御ん物がたりとも見さくめま
いつる留給ふは。さるべきけめそしく偲そ
隠を語へる給。ころらんこそとくしきやう
すゝられけりしくそとさ世給ひ。御かはりへて申つ
うれ御かこなひくへ。そむしくとなりぬいさうそわたく
君の。うら給世いゑられけり何くこらん事。あはれて
すり歌しうて残。文ふ一所ともの給らりさ
勝めうて侍なくさめくてすゝさせ給かれて。ぶ
ゆきへかしきおはしておはすうつりし御へ御とをみ
やう侍世いうしむえめ歌。いうれすそんなる

かく世う物思ふにくらへんかはりとも思さるゝか
時なりしよりもすくなからんとそなたにおほしつゝおほく
くしれたる御かたの御事をおもふにつけても思ひしらん
猶むかしをおもひ出るまゝにあはれにかなしとおほす事
ありしにかはらぬこゝろはへにもさてもなくさむこともやと
みぬ世まてもとのみおほしやられて左衛門
こうれにも猶おもしろしくへ給ひ人のこゝろとはさ
難波まてまかりたまひてみしよりけ
くしとてあさましきまてこそいみしけれ物の給はせ
まいらせんつかひなとなしけれとはたさへ
ちかくの御子さ給ひとめひて左衛門の督をもつけて

られ給ひの御あつかひとかなしみあはれとおほしやれのみを
そのほかのなにかのこゝろもとなかりしへ
なきを御いのりになにくれと給ひて
御たからんはそのゝえとも御かへりてお
まくしさ御ゆかりまうしてかひつくす
まされさせ給ふやあさましき事なれは
みなひとつをゆくみやつかひさまなとし
とおほしめしたりしにやかにあさましき世の
まいらせつてあまたのかにひそを
くてもさる事よそなむそふなり
物を○みなとうちとも君をほかにやりしそ

しおんのちはすきか給はいとのこちよ
まことに給はれつらしゝ御前にちかくおつ
し給さふらいはあれ共さしれなとものしれかなとう
ある琴なをしてかれにさしいれてきこえ給
てさらさつく給かそれおりの向てつきてらよ
こほしく思ひつゝきこえしらてわらつきく風
かをおもひしに当座を過しなとさそう○ことをかはられ
夜なとはもやうしく御かめかならんと思ひと
そられなと行のえしてもおつる日にあ
かさの風めく事を思ひてもおもてかね
ふるさとは難後にけるかれはらしてかえる

の藤花も給ひをすくなくしみゝのうちにあそ
ちこれにち給はいひつくを程あつねんとし
身にはそれも給ふのへにはいてとてゆりしはなにとて
なにとしえしえむにひまりつ夢ていへりれと
かりひらしにも給をつさいのちをかつれ
れをと身に三と浄はとうし御しよめふつみて
浄仏と・ちりかくうちへまいりそこてあし
ろうしてしにうき世のさかをらへまいりて
これ浄土を向ぬなりといふとてそれしてとも
ろ生浄さ向り浄勇はをてかすんをゝ人の
かまふ数事いとふくなきおもしはくひとゝ悔く

おほしあつめ。やうく御身をはなれまゐらせて
御らんしく。猶てもさしあたりても御ゆくすゑ
思ひしと御くはみえしれるおひうれさせ給
いへりしとのたまふ。六ひさしく後ゆへに子すのれ
紳をいつはり申事とおほしめしていまさらに
なくらひをもつやうには人まうてくるそていかり。
口傳事あまのらんとにはあるまじくゆんへとく
けんせ御ひ。やうりへとまにくやうしまうしとあり
まゝくをくむしるしりうんへとはあまた流
ま法師て御さ。たうはいりのおほしめしよし
ていれそうなしもやしとてまく

行はいとまなき御心くはみ御佛事ありしかんとき
急おとしくれ給のにはせ人かくらんてむく給
せ人あらそて一日に一とくれをさしたるくゝい
銀をもつましきほうまゆるもせうかみもとの御
善いかゝ和のさゝえんよきしいそ続
こせのかんすわさ御しれ御事をてみむら
それあるとおもの師といさのまゝせおりし
御を文はまにとのなしあるそうゆにりん
みもはしう給をしせんくはいたさせ給て
人もりして御むせらん。ふさのうたのてゝま
なしらんさ。いてこれなましくての御句ひ

むせん人のよ〇ふゆうらんみゆられ出家れか候も
みゆるらそうらうしえらんつゐ候てほを給へ
しゃせ給ふわすさ乃従ゝえこゝろあれ
行乃よ伝人はも名ゆしきやうそても
生れらしゆうらゝ善れ花秋のりみちも
人より行乃きく袖を画しとほかくとも下
候しもき是れきんさいの名ぬもきいちん
ちりあるく御候しかしおそれなる梅よ
ていちらたきんさいさうりわさうゝて御
らんはへしゝう国もくゆゑふゐれきせ
のあゝひきえ花とゝてみは当てもよ仰也

しきゝておもる経り四人とは字をうし。大
ちうく行く世乃まれりゝ字すうまん字すゝ
いめあゝ経きてまわにもてみなてあ紙ゝらは
世しか行し経しゝまうえうい巻れ草ゝ
うふそれとそくてもや経のるらそれのみそて
たくらちもちなれまうは行しも経んさいゝおなら
えゝうちゝらう世経らし。うき事もいみ下
きまものやうて経の蔵あゝ之いそき紙
いはりやゝ世かゑゝうまき世は浄ゝ経
経うゝし先らゝく御のえをゝてなまも也を
しうゆしもおりひ光のゆゝ物しゝらゝ川の事

よつけてあかぬゆかしさはしれしてこそいはゝ
御ほとけらんにあゆみをはこひてほとけの
みなかたりいりさせたまひてしのひておはしまし

権大納言為家卿七日の願文

同

きよしはなまきとしはやつしなか一切の三宝に
よまはあり。それはつねすきさせのかしひとなき
よろこひたてまつる事よろしかるに月のまへの
わかきよ多くねかひそへ。明けよのゆめたち
まゐるまてあんちうしてそらの月月もなく
むかしをおもひ。又ある七日なりけるまて一時

のきみのとみちかつきしのちる。あはれやあはれに
きみもみえしとやかりける御ことをそつく
中大臣そうとめとせて中ことかよひま
はるかしのことやつててたるまつれた。玉乃
ありしはさこゆるかたしし。はしまても
ようゆるかさらとむかれとも。御けはひも
ひそかれしらるへし。きくところの
いはてむしりよすねれ御心とこれ
八十年のよろこひし。二やうやく
よろしき人。時の代のきこゆあそき
てまつり。あなれつるゆうきたまのちら。

三代の撰者もそれ／＼きこえありし。あるなかにせよ
とも多くあはれの事をのこしおきしせよ
もりしらんにはそらしもへ。はつさらになをうし
くりかへしつゝ。後世をほとこなしれぬのみ
ふ。古今の道まことにはるかなりけりくなく
ゆくかくなりけりを放れ一まつ法花乃妙なるよ
て。日しにかくしもとつしむる年。二百
十餘歳。経まひ乃題をもん今もなきまで
さ。倉仏かと多分事かし。後りもりか
かなて物とひろとして。とまたみてまさらか
しらは乃それとむの威りし思ひとそあて

をあらぬきうち續あらぬ放こなりをくなるなく
さむくさうなりあまら。也しけるはらとを故
乃こゝろかしかくかまれと。わかめからち
のなみれなまもいうぬるえりうひかさき
む。古口にとも放きありしきとさすそくか
年まれくて化りありく人なめしあま也なれ
なれしほやれいう故を放く始と井乃衣
乃いと倉をひひまなくりれくて哥れみちて
なとけれ人し事。ゆくとせかまうこうとも
しうかにまやなかの小言ん。風ふちなもしく
むにきるかさ世をそまる(ひ)むとよいはしとの

あかりしかとうくわぬるかなひれとうへといと
ひなのさしれ月のんつくしつるこほうれく文
もり新儀かしみ君也君よれはこゝ御に
つゆくを消やとこゆ夜とかくへ作を網
又八日にをりまんよりしとうくわ御
ち給ゝ身いふしへいましれわりまねあり
とあへひしりを尼うも法むろくとさす乃
みくおれしこちほ乃う色とらうあとくだ
りあさせ月かく返りそうへはめ生れ而
とつをしらせんときわとをり搭ひしす
殿りわまか海の麻えとけくわる明をな

さまはさくられる菩薩たちさへみともみえとうはずに
こゝろよりたとへてもおほしめすへき也経をつくるを
わらぬをきとれきよきはしも見れはかのこの
よらの寺をしは唯法にかき種からし
まじわるもも仏のうちあるにおはしくきそ
御つかは法のいふそれとはつきてかりさへしや
せんといゆめんりいふとくまかくやうくつ
の日ようわくはるまひけるらさう法より
一部のとこさとけわりしするか法花経一
部無量義経観普賢経心経阿弥陀経ミる
さとうりとれかしく見とるやうさんあんし

てはくしとすて入道大納言のむすめ三はなは
つ孫は世の哥とのみしりてかれはまへと
わかりしもやくらんけるき物といりみち
のこるまへはとけはひさしくありとつし
仏をも絶えいのちもとをしろちうとにいきし
絶命もあく程てをわつらひてとをやくしむて
かうし武蔵のかみねくほうかいりしとは
してはたちわれの往生とさくさんせたる事
きんちゑ年六月五日才子数日
と伊勢彦無ありくうひむさ列治ま
なしさきえておぼえありそん

いさよひの記　同

むかしかへのなかよりもとめいてたりけむふみの名を
は今の世の人の子はゆめはかりも身のうへの
こととはしらさりけりなみつくきのをかのくすは
かへすかへすもかきおくあとたしかなれとも
かひなきものはおやのいさめなりけりまたけんわうの
人をすてたまはぬまつりことにももれちうしんの
世をおもふなさけにもすてらるるものはかすならぬ
身ひとつなりけりとおもひしりなは又さてしも
ありはてぬ身のうへをおもひしりてていて

すゝこれにこれ色しりやなるとうかなしかれ。
さることありおはしけるにつけて、やまとうたのみ
ちはさかゆくこともなくてかすかなることかり
しかりつる人々やけん。日のもとのためしにあらんは
いまそひの家しらにようしくのうこそあられ
かくられしとたゆましく、世にあさきやれ
よやいつらかるのかたらはみなりかりしもこれ
みちのひしてこしかたりぬをとろしとまとわり。
さそして又集はえらひあへるきあるかしかりれぞ。
二たひ勅として宣て世としてめしけるか、あ
家々にたひたはあつることやあかりんかあらこ

申しゝ事はさる事有けめ。見るもあれなのてにも云。
ともかくもゆうしきうつくしくしは、いうかなる事えあり
けるとかや。おほつかなくしるふしとけれと、道はさと
家よりはちてぬれちの世は色にて、めの北染
はじまひとつのすかなけれとも、世のすくせ
きさくめられしうかふとちふつたれことしゆるも
又はじまりの家と宣ひしはやこれ今しまふ
しかるに小倉の哥は、あかずのかきさしけむ色へあり
やうくはやふにたつのみちさかゆくしあんはまれく
家に至て今ら小高き人、おしよるの何ひとへんもと
やらく云つさはもとれたる。まことはふよけやかことも

とおもひつゝく。道のほとりの垣根もやらしもとく
すゝりへくまかなあつまのゝくわめに続ゆりけさに
くもふねりぎすやあらき事くしぜらてらうはまか
てよ殊はりちくわ成かぎれ。所はよそれ貴
ぬ由あしき事く。ゆくりすめくいさらふ月なさせ
ら様いくかじよ思ゆ由人申のかまどして文
食のやらひく。うさうふゆしめ給じへき国し
こしらゆしあそ給。治る三冬申つけしめまい
あまは由りそ由く給ま対面しあえ給。ほとか
こさむ由来のまへあさきにゆふさあれなる給は
やよ由給れまくこうて様はちくうめしまれとへかす

おもは道すれは。つさらしとてさらく由す人貴ゆし
あらて由かし給く。いそ化なら由かうれ給せとかけ
有様さゆ給れ由さりけつ庭し由つ化ゝ由く
くとくを由らめれてなきこし貴れ有人こ
の秘の方いくしなくさめつのこ有中しゆし意
あつ化ある人あゆのいけ給らてしうらく。つあり有
さ由つとかられし貴れいさ由くくいゝつてら色
様やのちらされいせうく給まちてかさふうにう
ちゝ給さらしい由てうの給しくそかさこらふ
りとけく
らつめ給く由の貴由らて給ちのとさふ

我身はなになしたゞちうちもうりん
代ゝまうにとう徳ゆゑにこの何かしこきの
おほんかくしてあさかのみ〓ハ波こゆるさへ
ぬかくちうつゝてくへとらうとてかみの人のあす
もうハ濱千かやとくめうちくしはなま
これとむかしのつくるところみよ
あかうしことまうこきうらなり濱千鳥
いとうくあかめ何と我身まして
道理こそさちうのうちうらせいとてらうもの
ほかなよし何て世にあらくしは
うつ〓我身よの何か世まのつくさハ

ぬよつまして雲させハ濱千鳥
ひとつくあかぬあとにゆくれとも
このうへの幸いとふかくあはしく雷れハゆやらくもりハ
れすりなしむのしみへ〓さらせとてまつりあく
て又くらさかとあ〓支のつくつりにすれの
はつ〓〓かすてられをむしかゝ而後らにらひまうて
ほすしひあさうの〓これハ
はつくもゆさにらゆくちくされく
いうみそすくみを〓〓すのゆせ
こうにつ〓身の〓よ〓さにとものつ〓されて〓
ぬしうとにうさうへの

けしからぬ心かくのみならずおもしろくハ
今ら深く〳〵として色々にも
こそうへさしむらやましきさうれけれはのつれ〳〵君
つくゆらぬむとそておもしろくかきりなくとも
ほうしのめされはひあけ給ふこれよりきもひとくもゑかく
まうけたる色さは
あくまれおほくもうすくらう事也藤なれて
四のゆをてあからき色は也
といひとてならし我からの深くのこけるへかあらくうま
ありしいまたらもにを河ひく氣なるかあきの
きこへハ山巾しまて此人よりいにに此ありのくちれ

あるいは道のたよりもしてあたり西のかたにの
すひよ文ましらぬさらしやいとそのかくけ
おほやうそこら給ふうち寄らる藤
うちうたのひ観のまちはへハ
女子をのましくほとかひとりゆそ此ころち
うれからの女院きこゆひ給ふ院の御つまと
給ひしまれ給ひ討まそ御はうしを御ことく
てかとあはれなるすれハ寂のはうくにあはれ
かれくにさくつあそ事は侍従よ人ねらの事とく
こおもひ何色にようしても猶うかうきつすくおくよ
右民こそいさ日也女のひとなてし

のゝ草むらしこゝ露てしつりすれ
とやましあれともかの庵のとひまゐりつゝも
ほとれなはかくて寺に送りましし
おもひやくむらくめいかゝさとの
ちりゆくしられしや由とまてしこ
とかくはかこのこととは寺のつれ〳〵に哉
ほく寒ねはなつかしうゐたゝしとまことの御らんせしにはの
ゆゑゑかなはるれてしおはゆかのほゝりかなはし
いかにかさうつゝのけくてしいりゝしてつま乾く
ありすてはくらやまみ雨となきし車く
見しいかなみかなつきのはせたこゝゆかなふ

さためなき命しらぬ身ともおもひ成ぬ世
まくらはつきしとたのめくらり
かくとつけ給ふしうく河さき人しれす涙ひへ
それつゝやくことぬかれもとふて、けふり立色
ちらそくと
うちすけ給ふ河とおもふ小袖のたく
ゆくさ比らにつらぬ志のりう
こしいかうことゝ下さりけく色しとゝ泣さ
かはもし書をそへ御身はかうしかやさしと
いな雨てちらてもかぬみつ申をけ給たまはし
ありし身かたかわ

いとゞなほ袖ぬらせとや宿りけむ
まなくしくれのもる山にしも
けふは十六日の夜なりけりいとくるしくてうち
ふしぬいまた月のひかりかすかにのこりたるあけ
ほのにもる山をいてゝ行やす河わたる
程さきたちて行旅人のこまのあしおとはかり
さやかにて霧いとふかし
旅人はみなもろともに朝たちて
駒うちわたすやすの河きり
十七日の夜は小野の宿といふ所にとまる
月いてゝ山の峰にたてる松の木のまけ

ちめ見えていとおもしろしこゝも夜ふかき
霧のまよひにたとり出つさめかゐの井
といふ水夏ならはうちすきましやと見るに
かち人は猶立よりてくむめり
むすふ手ににこる心をすゝきなは
うき世の夢やさめかゐの水
とおほゆる
十八日みのゝ国せきの藤川わたるほとにまつ
おもひつゝけらる
我子ともきみにつかへんためならて
わたらましやはせきの藤川

清見関やのうしろはゆへりうつゝきあわ
　いまか清見清見かせきやいこのかたとれ
　波高し清見にこの月もうつらん
関よりもこなたにゆきてけるあめかしくれはしめてあう
くら崎は道を浮と行しもとく四よりもかすかなる
いはしりやしるふ原まてゆり
　まひ人もとをかへりてしらぬふしのよやま風君
　あめもやしうる雨かさなりひの里
十九日又ゆく夜ふかくゆくよしをうる夜ゆくかきける
雨てうひとれしもやいゆ程のみちはいとくるわたる
高人へかよふ色くらつはねいはゆ田のおちて浪う

さぬの夜ふかき色くおほろに物てうゆる浪を
ち江のうぬは多川をこゝすれゆく道てうゆるかは
やしろありく人もし色をじを西の神しとをきこ
ゆるときゝは
　雨すれ多くちすさしてを清み神すゝを
　と宮ねうみてけれゆましさく
とかくしてやうやう川はゝ大井川すゝへく宿
このけふしやあらぬの里らてよるゝはれは
ありいとはやうされしとやすこれ川けくとかう
いてゐうくてかうくらけきされは
　かくゆられ舟にのちらむとをきのみの夜

国立公文書館 National Archives of Japan

人々は、これをきゝてさうせうかぎらん
かゝるの世にはゆきにけるとかなしみけるに、や
こゝにたゞ一ねんの心ともにはしめして
しゐおもひけり、家にゐたる文一まきをとりやしろに
をさめて
一菩薩来迎のありさま如来御仏ゝ
こゝたのもしき御事なりけるとかんし
二十五菩薩の国おもしろくおもひけりや御座之
しゆ返されしをこそ色紙かきくゝすゝ
まゐりいつみにかけて見せてもつら言の
御ゝはせまゐらせものを

うちひらき見れば神のまへにて
なにとなくうつりけるほどに像色ゝにもなく
あらしさかりかゝりくらし
今はしはしのさしまゐらせけるをこと
神やあはれと見ゆるさかりなく
面の像し神のおもしろくあひまゐらせ
いつゆくにもさこそいかゞなけれ
みなひとつとをれいさゝかもひとつにかはりなく
濵なるいとをかしうたちまちものうらや
からしして
濵なるみなにまゐりさうぶのかず

あしこめしをは松も見えさりしは
とこくつ古をうてうて越けりと見しかと
名やこゝろとい猶ゐるれはしとわし中あれは
見えけ浦ゆくけりつゝ見えし
いかゝいひはしとけしとなわうさり
もとのすゝうてれ見やこゝまてうて
二日まて過ゆくてらし跡とことに候と
雨日よられそ出
けりくとこつしてやま侍ゆ前を見よく
たれもまちつゝゝゝみへの中やこ
八幡まうて帰んといふ猶さてはしれては

ならね
ゆくの本あくりてゆきやうたは八幡にて
ゆふくれの宿にてとまりあかしぬ
廿一日八ちて出は雨ゐりまいとくこれより山
すゝる跡見えて跡は跡なゝとゐりゐりてみ成く
をみちいゝ出てゝ見にもゝしの比雨りの風となけなは
所ゝなゝ祭りてそめてゝ雨名りゝとは八幡とも
立ゐりつまてあとられめ前は見ろゐりもへ人ま
と色は出られ出てゝて
出西名りましゐ手しはりそてはまく
とみちのめしたちこのそろうしく

はやうまかてなむいかうしろめたくゆかしうおもほえて給
ふ人のいふなれは
　御かへしのかしこましくきこえしさせ給
おほしけるなれはかたはらなる人のよみ
とのまうし給ふ御てなれはかくなむこゆ
けふのめしてまゐらせたまふらむかしこまりにとなむ
人々のなかに
　おほしやるまつやまのちとせをかけて
　　かくつらさひし若宮の一しほ
日ハかりけふたち給へる御かけに人かなし
またなりとうやかふ前てしらく御かけの

廿二日のゆふつかた夜のうちに宮の御かたへまいりて
ゆくへなきともおもほえぬ
　とみへる月のかけやさしくて
　かはるともみえぬあかいつくしみけふに
よもすからへたてなきかりの人あかつきの月を
うちきこゆるもいつはなくて
　藤人そかれし道やゆくてのみ
　こゝろなきにつけてもあかぬ月の
たのもしくなりぬるにもあたらしき
しらぬ世をへて松のこゝろならてなくて
わかたのや浪しさうし満濱すま

すまにはみなかせの波をやとゆく
浮世しらぬともたてたるかたに一それはしれぬぞ
いらせ給ふよるのまにわかるゝと
しか濱にすこしは夕ぬ西志回つらき
ゆくみちとおほしむるかりそめてまし
くもぬれゆくしらるゝもみたるゝせいかにもとりなる鳥いと
おほくひちかひく波のうへに色もいろ岩本
かなしくおもはり
いはしめかすむかの浮ゆくらむすゝに
まことのうち家こと袖なしこぬれく
いひちくひとゝ思ふおもひくやしいはさきつらてう

ふく御かへりをらは左右は若もたる御扇子をは
しおもへつもひとしいつかの念まましとも承れ
雲すこ人のおほんの家にはまかくさひおはられ
て文かうりはひくみつゝ命はかなくてぞ人とく
あはれなりし
濱まかりつゝりなの家はとてまて
みしく命すこしてけむはうしとも思ひぬ
すの世にのこし人のこゝろこそなくをしはいとかなし
しらぬ
十三日天のとしはしまかせはかなすのうら女
雨はうちそゝきおもひはつらねくいとはかなう

しゐてはゝ世をうらみすしてしむかしく舞
人の世をしらぬ身しも色のひまもあらし
三河のあしれつ八橋よわたりかゝる風こら
らや花の小舟わさはもやともめ
こよひはいる八つの川あれつて八ツ家の内ともくいつ雲井
さくまうさ中に通しく旅おもひ旅しかさいなり
咲の井ありけ
たましての秋しくこゝの家れ川しく世の中に
いらしりひ旅ゆえ見る旅しい秋
女の目ひ首よみなりてさやの中山こえこその内ま
こうやりふやしろれかしい道いとおもしろき旅

ゆくほとしもとよはのおもふ旅くつる内よ
ともこうのこねはくこいとらあく川のやうく川
られすら旅きの里にりきく川と見つ旅り
うくまり
これよ遠江さよの中山やこえり
まつら緑とらうさよの中やまよ
行う里さゆさてこれは月につくはるらる
雲につ旅よやのるうやまりみつ旅を
こやこゆつ家よつ川のあ家れ月
何なとりてとをこし
とうらむしと秋なしや、のこし東路てり

ありとはかりはきく川の水

廿五日きく川を出てけふは大井川といふ河をわ
たる水いとあせてきゝしにはたかひてわつら
ひなし川原いくりとかやいとはるか也水の出
たらんおもかけをしはからる

　おもひいつるみやこのことはおほゐ川
　いくせの石のかすもをよはし

宇津の山こゆるほとにしもあさりのみしり
たる山ふしゆきあひたり夢にも人をなと
むかしをわさとまねひたらん心ちしていとめつらかに
をかしくもあはれにもやさしくもおほゆいそく

道なりといへは文もえあまたはかゝすたゝ
やむことなき所ひとつにそをとつれきこ
ゆる

　わか心うつゝともなし宇津の山
　夢にもとをき宮こ恋とて

　つたかえてしくれぬひまもうつの山
　涙に袖のいろそこかるゝ

こよひはてこしといふ所にとゝまるなにかし
の僧正とかやののほりとていと人しけしやとり
かねたりつれとさすかに人のなき宿もありけり
廿六日わらしな川とかやわたりておきつの浜

清てうらハいかゞすぐし伊勢のはいたゝの月影みを
よつ花いくらかは富士のゆく雨ていはゆかし
こゝつ宮のとまりてけふは、こゝろして雲れいたら
四しるすてうもとつゝきそゆかれハ田舎る人もなし
てうたしかうしかきつゝけり

たかはさうてみつめりりハはかつとゆくら
むすひはそにいでゝ人てかくら姉

蒲うち而かとききよそこの関はもく、嵐こゝに波の
あはれさ貴みばかりきこえやうてみをる、
いとかうし

清見かたゆらいそにもなるゝうき世

なきぬれぬ袖きぬ浮世にかゝれねさり
かゝれしくもれくずれさかれは海ちか見さと冷て
まりぬ浦へ出志つきさや、とおりよくゆか
うく浮かつて浮しむつうにまかひかれは夜のや
とみなくさしせつひきつ人のなとなくそうつく
らう、夜しもうるなうせつしれまく浪て龍のとよ
あらさらく

あまりすぐ金谷てゆかし清見かた、
あら旅すそれ馬て百ねさめは
あしの山風これてすつてゆめにむすびちてた
羽田なさうえしく、いりすらとめくりれてなとよ

みしらぬ所にありての心ほそさはいふはかり
なくおもひすてしおもひ出るなりとて女
伊勢のうしとやうらみえし也といへる心なり
ことなる人もなし
たかくおもひこそそゝり富士の山
家持すむ事なき人に似たるかな
古今の序のこと葉まて思ひあはされて
伊勢の海のこゝちする人の心の様は
赤人の歌にやさしくみえん
とらへてしおもひの橘はけにさや
あはれなることにすゝみぬ

こしかたはなにとてかはかくすゝきこゝろ
なき物となれるかな
廿七日に家をたちてかけてよりさまひて川
ことさらにかつまたは十五日くらゐの所
河をひとつわたりけるとて有所に河
川のはたにさかひのさとのあたり
家持の日にかへりてたこの浦にあり
河にかけてはいまひとりにしも
田子の浦に心をかけて清見か関
かさねてとせん人にかゝれ
よそにまかりしきは伊勢のあはれたつ

いまゝて夕日のかけに今日の御神へ日は西
にそよそてそもる
あはれとやさしの御神のこゝろやはらけ
まちかねしくちかるきにたり
そのつゝみはけしく降くぬれて出るは
神ならぬあはれさし御のいまち
天神様さてかうらはかる事を扨御神
やまれひおりきよ人によせてなほなほ
女八日にはかのこぬ浪にてみにそこねちりてかゝるまじ
夜更て雪ふれは
玉くしけ家ともに神のやしろは今宵より

たゞ波の河内のいくその葛城や岩橋やかけて
かつらき山を見ならびしてこそ路けり
うち通ふまでの事
世のうきよまでいのちのさふらふそ
子をかしおもひのかはらぬやう
いまさらに貴やかにはくさもみへぬめしことかな
かくしゆさうにおもひみぬるからきしてこそ
さてもまれに文なりしに申しつるはかなり。御
ことにこゝにも都のみかどかたちをば、いふまじき
色々になまめかしくいはまほしうてさうしてなを
はなりせじかし

あはれなれはゆきかへりてこゝかしこせは
ちかくまうけてやま川のこゝろ
やさしく御消息には日くれてまかりぬ事よそ
見れはおもしろくこゝはなるかなしきに海
つらなるうらにもふかきさまなるものかなしく
あやうきのとをゆかむ
　あやのすちかはりの衣にもみちの
　おなしきはさしもなくやまし
めくり川とゝかるに(?)したりけれ
おもひやるこゝろとゝむるまてにいふも
ふる山のこゝろにもあらす

女九月さうし渡つゝ浦路をけふくせり
わかれゆくこの御ふみには月出て
浦路ゆく月かけ波よらす
いつる君すみけり御覧の月
なにさてしせんとのさくらおもひて
まくあはれつきねこしになりぬ
あかれてすゝみたる君をしや
浪たちわたりて御消息須磨
みやこに見るつきてねるに千鳥の
なきして
　立てわれしらぬもろこしもせし

いふ人のかれし世よりは
あはれなるすみかゝ月の宮のやうにせよかし。
かちりにちりしみて風にしたがはぬ事のうき
ところにゆとうてりすちくて君これをむもて松の風
ふみと都の名つまとゞるいわしくのかかつのうまか
也ふしをゞかうらみてゆきさはひろうしらぬ
かたらさてありときつ家やるるしく人これすちゆ。
たしのねろ名くりもつ家みかのまし返しと
おほしく御
名ひくくまでくいこはら出てかのやう
しくれぬひとしきうくつら事

世をうとめくかたとらねつくしうきよしの
月やとくれなかくてとたる色まく
みやこ所つくしふとしてく神無月十六日すりけるに。
つさよふ月はみかしなしかうきうきりやとて。
伊勢やかくあられまでかく此返事いかう江
つ文まこゆる
めらうとかはかすかは江たきじゆうらみく
えてりうかし伊さよひまかはすて
こたかうひむう気のうえたかわれ御女房よし
人のそちくせんみくしくひしくり入道大家に
此雅有納言しまこゆかへ書のまゆへ明日申

あはくのいはや。道のほとりのあやしきつゝみなとにて
つきすへ西文てり
けるにしもをすゝひしせやれあひかへて
みるく天のあくかとや伊のあと
返し本
おもしろやき露河面とひとりいりて
やましちかわしし神のしるしは川に成
ほせるしものたかりぬの君とゆれしさ田すりお
かつゝうすきれといふか貴なる
右衛門督敏しりもうしたるかへりて
ゆきしをやいとゝ深くなさるらん年

返し
たひらの母宮の家にて神まつりする
しくしく雪ふりて雪ふかくなりける夜
たさうしもんわうしのくるまのこ貴こゆかく。
このれ右近大臣の御川女られし續道續よりさらに
ゆくこと二年ひさしの家このむら貴くてりし。歌
のあまさつり浪のくへおれしは君しつくれすき給に
もはおんのむしの母一り。御つくさてさわらひ給お
川まらせひ立しおとゝてつうまやれようしる。
小白川とのへ田つのしうしかんえをせ給ゑてさるを
しうはこゝんいかなれつく多りとのさわつりし

くこ申ハかくしも御ふ常てし行色にハうたハてらまい。
ひとりかつまねくをそハしもの書この。菓の桜あうら
宰相ハ人萬のめうハうさ。ゆさつのハしめさたまも
う見給何かなと申
常えの面のみうし面うくいか常えれく
ほとゑくてハ丹そゆ比てるりゆく
なしさて面りしハ。主う色りてれ而返事あ
しうしかうかし。四ての宰面いうそけるハ。ゑつしい
をれ夫二月。文面りえくめつてしく行しさ。面
ほ行事ハこ田のまや多くハてうハしハれさ
たへ人のまかりうらしれかし人くそ。面さ面てほとまて。

おもふつわしいうても。ほいあうてせ。ほ思ひ給て
しそれまいりきゝ日しをと。これねとのくめきち
又にをそわりに人ときうひあしかとお。後まてそく
面事しく常らしハしゝつ。まやうくとそれん
諸ハいさるとし
一くさま神やゆれましりひつ思ら
こ行日後さうゆうをたあとし
さてとをれよりも宮まりりいれもそしいりく
れハ返事かき
かくいゆさ御のおもれゆうかうし
かしいくて升ほあそれかうしる

こあれはこれかひなき文なれば目なれぬとけり
御返しいかゞとうきことゆゑ
四の君なまめかしうじらんなるひとへの宮
との日をうつしもてそうかまて
賢なるゆへこそてうしもとうれゆさうなく給
れ文まうく中にもおほく思ひてまうくあつかれけり
なのとうくしかうの君よ。ゆさうに人への事
さ御くまうにやうかにきいの屏風をまく
貫之ゆれはたゞいまけう御・れ本尊につけ給
東てとこの君まさしく御もしかさけり今を
いうとの御てりひとりゆさあて

又ゆかしき御まで右のは悪しく此ぬ程中そうと
のけはひ御せもてもとゞめていまもとゞめて。いうそれ
ねとれはしくき。けしうはくこけつ色く
伊勢の御てりかくうとも吉やくもさひめて
うひしやられし。置の給ひと
かう思くこのかゝもひなくうり此のうちと。御宅
あられめてされはけのの君てこ
たまの給ひたうつるさくの君のあれ
いうこの御家ちて女あうらしこめ
これの君き。帥の中納言ねとやもし人道
ゆ思けり。今は三位入道といひけるにや世かへり。とは

さうまそく。ゑこゝろひあてくうる人おもり。世のおほうけ
とのゝこそ。めつらしはやうしとあり。近辺さ海く
てつかはす宮の人。こゝろあるへきよしをそ
やこみとゐうる下てりゑはもあす。やさし
くかるく
　とろまとてうりうましし焼うろなり
　すて袖は波こしの宮しな
これ人とおもんのむし浪てうきゆらひしもはやく
ましてもろ事とし給。おもひはすなくに
ゐるこうとはくれなくい。おりては日をかつ年られく
昔ねとすりに給かね。うすそこゝろなすのめおちぬさ

ゑとしき。昔の事をおかつとすれとしやうらひとみ
くけ蓄らぬはしをしやまこと給なれはあゐゑ
ゑの志のひかくふし。しちく清ひし。紀日とみく
し。文みれとこれたりともありとつ筆おろ人ほちを。
まいの事と色の文うくすにつきとみ月とふとい
れ多人への心の弁へ
　「おほ月をみやこあなそられの花
　又もとしをうけもしかえのよく
ねとうこけのよね宮事とも給はれやのへあう
し給たしうね面所にうさはそうてちくうや
ゆいたうかいとをへと御らとゝろてまつる

祈りしみやこは月頃見てありし色く
なれは雨くり過ぬるのよ夜く
権中納言の君ゝ御さま西ゝいとすくらうぬよらん
まふ人なれは浮かれしそすゝひてしるあつ耳ちく。
かゝ月頃つゝそ見まくまつらてそらうけ西なすれは。
うひなるとひろふかれなすゝき祈りしまな
こゝろうしておしかりく
伊勢の海して声らし恋やこはまきをかしけれ
すまのひまかとわれうとくるゝ
声うらかし浦やましの縁はしむつのくもて
こゝやこみくる絵けりの明石

それ今まゐるつゝくらくる夜浦の縁て
うすきたてよふけの夜は月
あはれさらぬいうちかへる縁はいよゝあ
かうさく花はなにもの宮まよひ
高き人ゝおもひしつくゝあはれまられ
それやいうてせをもそれてまし
せしまくかくてり縁でおもふすくにいうせ
まつけりひをてかゝすさすやうねうし恋ひそか
世の色はをしあまてり目はうれなかつらねさく。
せ文まうとくそれぬつわらしておもと宿
たのひとよししはひてひろふ宿のとひ

うゐある事はつねにならふ人の世には
かくあるべくかずまへぬならひつけ有明の月
これのみぞ心ぼそき様にかはらぬなれば
あら波君のみぞひとりのこりてこれを
かなしや事かへりつゝ宮にあり
御はらからはさるは今さくゝつとめども
ことやこれはれしくやさしかりし
やよひのすゑはつかうぶりたまひけるとぞ
やがて目とまりける事なく二月ひたすらほのかにやさしう
しはすのうちにうらやましかりける三月ひさしうなりて
身なるにこそよそよなかりければ御仏の御まへにて念仏一両

月あはれとおもひやり[illegible]うれしき[illegible]
しすくなからずあはれなるにおもひこそすれたまひけれ
あはれなる事ども多かりければ事どもあはれなる
きゝつる権中納言の御すゑのひとつにてそのころ
ことさらにおぼしめしたるさまにおはしまししにぞ法の道の
しのびやかに家のぬしもてあそびつゝまかりて
てこそはまさりければいとゞあはれにて
あはれにはいまいましく
とゞまりて見つる人にはさるべきかたにて
おもひやるべし
後えいてこそうへの衛門督

国立公文書館 National Archives of Japan

いふならくならくのそこに入
御門きこしめしてめてたしとて
衣のうしぬきありけるをしてとめりにけり
なへてなつのとに秋のら春のまく
五月はしめつかたなりけれは文やれは人の
御許へまゐのけうすいのこゑしさみとりたく
なて出てまへのなく往うらめ蓋そてし
けるよりも哀にて何面あすなみて
夜をうらみてやみなん人くるやこゑもせ
いもやまけらむらほとくまれ
てれなし又あるき

まことにあはれなる心にいひけれと
かりしにしもあらぬものとて
はかなく貴きれはまいらす程
人にはしらせけるして侍り貴に
まて一つ心深き物をしけり
さ孫うこれ中将の五月まてはあることをくら
のをにほふこゑもをとこそ今そうん勅云
せにのつしむてわびしそつく宮仕こそや
やまれそめ御めかすれぬ絵しやし
おもひいて御すく文こそおこせや侍
けれとうきあれとおと語りあ侍とて

う月のすゑつかたなりけれとかくきこえ
つねにはのかにみえしおもかけの
へたゝりけるはひきのやけとひとつにあはれ
なるかなしさなとへきてたのまれしをとめ
なのひはきこゆるさのやけたの部こ
それよりおもくつゝけりうねのこゑ
ねとさかりてへとなへゆるひてあらしもとよか
はつかしらもみられはたえまてむかしわかきける
うきされるをたしらひやありさんにちにまかせ
はよしまれなくてすへてけりまちつるたへなしとし
家のうちのはにてあるかりやしなへくなりたへ

むかしの新中納言ときこえし京極の中
納言定家のかけとものかたりの草子にのちの事をしるし
おもひいてゝ中納言のむかしをさしよせ給へるまへ
あらく筆のあとたえけるに此女かんなの歌の家のならひに
おほくそもむかしをしのはるゝかゝるてさへあやしひ
ほたれなたひたにいにしへのこゝろあらしくるかなしきにしものほ
となりし民部卿のとけれはつくしあはてつかいたる
まつ人のこゝろさしけるやしたる年よりとて人にいさかひ
くとけかふらてとはれとわかしらぬとけからぬ道
たひの秋のはかなさてしけるこれからの事しく
はかなはせ宗て

かうはうるさき事にかゝりふけりてひとひさかれし
まいのみひの参りてうへくらん
し文書にとくにはし宮て平のくまあそう
ことねしまへ面てぐ人の御はたれまうにせり面御け
うへつま宰之
うれしくすとひまつりてをいしまゐの
子ほつまつらうくいたく人ほすゐかしこ
と申て御すばけるとてす故入道大納言て家まゐり
てもまゐらせくてゐてまし御のもし侍し
こゝへいりやけるれにとせかさきそりたつ
宮てまゐく御はけ面

あこまでかくおもしろし御ゐへわたり
ての御むすめ御菩提ほ
もうふしやまひ御わの前に御ゐます
さいわれしてめぐ人まさせう宗
ねしとくあてまゐつまつし故又あからにたく
まてるてぐみぬいちしくつて所し言し
うひまへりさしかしてかからとろ
あはすおはしますのまゐつそ言はるるを
うきれいちりたつかしへのゆめ
伊勢へ参りしのゆゑにかよる葬
すひゆきさけるみ御つゝまゝ

かしつまくり。そうらはぬほとには。やしきさまて あつまれ
くるまえのたいすゝみつゝわきしへ一さくさすに歌の心
ちかうのゝたなこゝろから。ら三十首はさいはひかうた
こゆる人いつもすゝしはうぬしからうりして八月二日
うけうひまうらえて日つれうまをになりけり人く
ぬみとも。うそれははやくみける。あつまりぬはい
あまうぬ五十のりしよりて。五十首の歌をよみたり
うらしそてき。ゝかいこく あつはへとらくつれなかりて
いとまつりしなりあらう。五十首よ十八首は
あんはひめかし。はやしくつのやこれひつめこ
すはるらめ。それ中す

ひのつゝ恵みそにしてとるひつかみ
ら編うきたりとられあてくしく
とはるまでにみうて。まうしの歌心にはおこせ
よまれん心うて揺いとゝ。四はやりてはうれなれ
て。越の歌のくそうて。をしちいはく返事
をうかうさへつゝやる
恵しの思かうやなふかふはさゆるす
ゆきこてふへる とられあて雲
又は たしかにひのあふりて
あはすかれ葉のまうてまかれまくは
おもしのや留まて袖そ露守に

こゝろなむありしを又、うゑもえやと拾ひさうへ人なきなき
秋かけし此草はまつらてうらむかせつれき
かすかにこしくすむしてのこは
又此五十首乃歌の中にかゝる衆はさうらふなれ
哥のさかみしもあれしけ給ふて拾ひまよひあれ
人々は哥
かれはそはいつかならむむかしひは哥
人ありけりて拾ひ来しおり侍れ
こゝにけるなるれはおとこしたなまり君のもと
よはれ、才舞はくるをつらぬかふ、花まてんけひて、
まろうらんまでにもかたりありしれ色しほも

れ給ひこゝろよしは十六さいのしき哥はさうなれは
やなるにおかはうを返ししてありやうとうこ
いかてくるかなおれしきひきかてまひてうさと
ちひ給ふこゝろのいそちも給ふまかてかと書
わさはこゝの人々くれかしくつけしかりとは
よまれ給ひの歌あまりつる
恋わかれゆしれはさらはわかれなしたは
わかろはうされいつまでそなるらし
まくら我も夜しはかさしはかと
かゝるまでしたかれくもなきかな
おもひとまんめかなうしと拾てし

もゝ雅中納言は君こゝろゑやうらみ申て下
おりゐ給ハぞこゝろふかくて侍るめでたいハ
侍らぬ事ひとつそこゆかりゆかしく侍る月との
こなたのかたにしてまいらせ給ふ
雲路ちかうなりきかゝる事申
し時なりてこゝにくもりの月うき
此御遊事にこれも古ゝろにさゝげまいらせて
かよふらしきこの外なれはさみくく
ゑたりし事おもはゆかりて
なこれ寺にもこの後思ひくつかりきこゆる
うれしく覚へし

其比御や家の風ハあまりにひとつ家の事也し
しうとも存思ひく思ひまかり給ふれはとてハ
うらときくるしかりてなりけれはひとつ宗の
すてらるまじき人のこゝろをたねとして読給へは
こよの葉にさまつきてなひくめり八幡の御神
よものこえはしをのまかきまうてえつ風も
やすらひ給ふさにかはらし時はりまれし
ここしくのみとのまゝにまさりて世の御沙汰の
もしまた御かさねり侍るあとさかりもれ申にて
義統は三代の迹人のこれ親王なりき
ゆかりてしものをとこそありなんうらにいかゞやし

そのかみ すゝきをみれ すれりつり たねほきゝ
ちりもせや 世をすつる人は いかなよの 水にたゝは
教ろのく とほしかれみに つきぬる すゞりらの
谷川 かつのは命 うきひとつ つきぬ水の
みるうちに せきとめすれて いひけつく 今の南れら
いはのことく らんなみか 字小まて まつりまく
まひろか こいに雲てて じりのつら まくしまこ
こそしく 身ハ教すれ うゐらみ 世はるつと
たちまれハ きさてたのし 一その糸て 枕こゝの
むかの花 まとは蕾 まりにうか わかれまね
世のうみ 風にゆら 東ハゆも 新陽蔵て

ゆくすゑみれ いつも思ふハ すゑのまん 世にはちかく
おもさしそれやハ あしはりの 道をとれ
ゆかれらん 人にしへの かたしの 雲もたゝ八
世のなれそ はきなし ありぬへし いさめて
さめくよ かはのころ 南その紅 人をくし
ゆけりと ふく人あらハ ひとつりと たると家の
ゆかりそ やむやいかゝ かくてしる 人みやかきき
まゝの世に あさいかまく なりぬとふ いきめはまして
ゆかれをハ ゆかぬはしも 又これハ 月ゆとを今
こゝりに 萬はへりけれ たのむへく すはと為の
ゆくすさハ のらりまとを からそてし 人のあまた

かくしこり移して御のさひまて一ろま人を
くらしつゝ頼朝は清水よしとくまのもとへ
四せ何くらこゆきさまくにの後へゆうふ
つゝまこけう冬の明日うけ八重の之
御しまて御勇け無のたゆさ合
御う言われしつけさゆへいの百すとう世ば
やけしこよ乗てりのくのへのつ
ゆめうし実とかこち宮うとて花ばうかさる。
くつしむいこきりば右人言んせいの節ばはしとも。
ちのゆきよそでぶり四ののうまむし色のしやう
こゝ下成はくへ言れうけ成候代はさ庵なけおかく

まがされは看武義のせんしへ出と射かせしまいけ
らて四いゝせられきう手す言んちよくせんあと合み
やうん刃めまきのくもまへのこしてとりふほうさ成
からてやされきう手
義ろうりつけゝるにわさまらす言へつく
のこ夏よりにりいかま成てしくれ
こよま我されは四郎しちやまりもとよいはす共へ
うてきうれ世らしれいうしは子ぶらくめら地ては
まわ言かちらはのの言こけ成すくして
わともれ常りしれかられけるきうけり
頼朝はたてけり宮成さいかそし

こよなき身のしづかなる色のことぐさへくされ
たゞ今まで此新勅撰に入事侍し

隣女集序

藤原雅有

やまとうたはあまたあるがなかにわが家のわざにいひつたへて代々まれ
すゑまで此国のみちわがつかさをかたまもりしより
代々の勅撰和歌集にえらばれていまにいたるまで
則きこえいまの世よりまされるなかめるかはしく
かくいはるゝ人かずまれなるもの
おほくこれうちのおもふ
さかりにいひてこの集に

なとゝめのこやしむるさまにむすびおきてなみん
ことはわかしき見ありいもとめの世の集の
うちとのうしかりもすききわたしみるみ
此ためおほくおなしく人まねくし
こゑよわこ此うさかやゝうさしいかさすそ
しもさりたゞいまひろひあつめて隣女
和歌集といへばこのさきりにふとこと
此歌仏さらみおもむきりにめたこれい
さこ此みちしおもうちひかれくまへ
さうちようつゝさこをへかやみをおほに
此家とさりまさうひて此集にしとの

はかなきとみゆるぞ。いとゞしくうしろめたくなかりし。
あやしくをとはいかにおぼしけむ。しらんた
かゝるまじきことゝ見えやうなどもいとゞみえこう
すら給へしは。それ給ふのよみつ給はぬ
ひてみん人に思ひかゝる。しいさうしに
ぬのとゞもひとりむとめやまう罪深くよ
おもおしたるやうなれもとみえて
すゝぬへし。おほかたはいとゞまなかりし
まゝなるくしけきとゝさまし。それて。
そひくみえやまのけなりけり。是を心をと
ことうつりしいかけれども　弘安のころ

あはれなることゝもありけり。さて。弁の
ゐさ京しけりしまゝそ。さてこそれにみ
しつき給ふもいかにおぼしとゞめさせやなりにしと
らされいかにくちきみえさせふまうかゆへのありけめと
をきまことに。さるべうなりつるをあさましう
そうし。いまの人みきてめらん世のうつりにしを。
のうちにかくもかりつれほどまれとも。ね
こふとこにはゆうしつゝありてよのりある
みしまにねすまゝ給ふゆるにひゆるさせて。
なり。文殿のしゝくいふれにならひつて。これ
ゆきこ内。あかき玄蕃かみれうへしくさな

うらおほくかくれぬ書しむなかるこそ。
身つからそうへんとすれいおもひのやまひ
あらくあさきひろんとそれきかうし
うれしんやへのて然かりんすちかくりう
いそれしよりてこのうちよかやめもかね
ともうしりまえて、かれありえこえかれ
いろしろめくい字れともちうりうた身此いる
りきうりうんまでしてはめしみなさん
このとよむしきる然打ひておきけうしるか
くいのうむともわつらぬへしゝかもく
稲とりた新古今新勅撰の十三代集に

此撰ばるゝよりは萬葉古今等の歌なと
いそのかみふるひね人とも其家とさま
おもひえんかの西施かとるこの女のかれし
とうやゝめろよそほひすこしのかららまり
はまぼろしくみけるけうふなす
へてこの集のなとをりといふことあり

野もりのかゞみの序

源有房

色ふし浩播磨の書写にまうでて侍し折
冬も人れはくさいふあかりまうらく寶
蔵のたからをひらきけり。性空上人のふ

ふさ調度どもとり出し拝み侍りん。
はかなくまんにしうきしくくいとされ
備よ重らりきく見侍しよ井中びさ
おか声乃おうくしにけつひくもして。
わ色よ光よわてさつくに。行のおやせん
もうさうる糸つましをいそらあききまき
新かするが備のかすまめ尼うりし寶龍
此中へ分入つて彼霊人の御足跡とと
つ重ねらくかれさ涙へ。是へ地まおにしく
佛の道よ入て身いそらかわかうう彼う
け守りしもの女りくれとりつ。驚くさ

延然人々も言りやりてわりひすんされ
申りと方門めでとりきさ光と申ん拝さ
侍りき。涙さとしくとうきなりいつとるの
いかりいさしく光くいけくよりきうて
行つる跡し寺門拝めよ。此国よりき
程西さ涵よりとさらんしらん。入道を
此あかりもみ侍りつまでも今日し地て
ようて侍るよ。国を負ても、ひさ侍を
ゑ。ゆらしき御んなしあいやさかせ八。
彼僧うらみて思くなく。舎衛乃三億の家へ。
佛の世にあて御身へ出事とる我まつさ

つまさ。聞しめしてくまも。縁のつよふかさ
御ちかは。さみちてそ絶わきれと。わきさ
むもなかずまへ。ふかれさ海されへすゝめさ
らへまわりきれ。寶蔵とてにすてれ
さ山まれ。蔵ちりく納まの核法ふひく
つま那意輪堂よまうてぐ治ぅり見
おろもれ。山てるくけはく名りまへ天
りそさみ。蔵ふくおひのかま治本そ
来よ小幸りさりて。海乃面さな
この前よはてさぬれん北しけ。すみ
よもこれ針幸まうそて。はらかり

のみちまけのかわつろるしうとわかて
まそ。殺拝恭敬するよ。おもれく當り
へ補の瀧。松風よきさあへはおもいて
信と催しおろわ。太山の格々る浪
ようあわれわつさ善なりされと。おろひ
去了御はしもわま。山路よりくれぬて
ちあやにうち痛しく。御堂は中人
人のあゆみのへ。これは幸まおんと
あやしろく。正面乃指よりわそひく
居さりしとちらくぬさるまてまて見給
まへ彼上人まふ御足結をてれやし

りける僧こそ、今日下向し給ぬらんと
こよひは侍つるに、二夜さふらひあひぬるも
佛の御ちからにやとうれしくはべれはかう
きは友まてこそ侍るよ、なかくまつらひ
ぬるかを思ひつる事なしう。今夜も
通夜せ志し侍るは、念誦の隙に静
みて陀羅尼よみけるおとろへすこ
しうれしうなめて、か様かりけれは、かく
いかさまにも三てゆ、念誦してしはゝ
まことにすゝりて、いらるる程とりくめ
すゝんとおもふ、一切経よみてさんしくに

文をよみ給へは、尻てさしくめからきて
ね、かゝいの汗とりのさい緒引はくれ
ひくくいきつき給わらさ面をのけ
ふくらひ入りつかまし、にされ共、いと
あやしくて、何の様らいとして、力を
くわしめらを推て新中納へかとかよひ
給へらん、面ふしにぞそええ給らん、苦よし
なれは宰念までさらはまいらせけれなく
しく草をさまらひ魔をとるそてあそひ
しよりさかせのたなるき孫りんを
とをめし、もえてにいそちまわまらまるく。

續とける歌林の末葉のつゆくはりら
ぬきはつゝめぬへき花のちりけれはあるぬ
月とおやゆみ、さすむくへきる萬葉乃
おしきをさすえぬる月と顧て、撰集
のあつましたよ、そのよ傳りし故に
いよく勅撰よもいくすゑたえず、ありれと
作くの集よをふれは、いつさ侍へしを
まさりむするかれ歌よ、信よハえうひつる
絶さるたのしれ、凡く続きハそのいう
又撰集をあつはあらし、一りかくさあ
侍りしくと今の世となりて、柿本さら

皆あつまりぬるは、諸のこれのもとくの
けるすまりぬへきあまりはかくあらぬ
つよ筆おほけくわかて侍る侍る、
新やよりとるまかすりうれ、あるは
みなが新の筆をしも新り給そうは
まう、いえ不思議よ覚侍るへ道をそ
そらあまりおほし、世をも出しそうまゐ
むそらの今ハいつまそて、友達ハけかく
んはまちまち世の事ハ何ふその侍すまそ
鎌倉といひ洛中と侍らへるはなふさて
しのくの、ちそさきつらといてやつさは

りょりて、一節よ念佛の数にひかはむ
ことゝえ、足もし往生のさはりなど。
御ぬつきさせなく給ふは、その比孫
とも也ゆし行人、源氏の物語も、紫式ア
行中のなりよりて、石山の観音、其風
情とあめし行ひもかとかんやけしく
て給ひ、此寺もまうて、同観音ふそれへし
まきはく、すくかうまみゐとし一へをなすを御へさ
なかれど、ひとくもまうてゝ給ひつるり
難波津のよしあしとかやいふなる人
みしをあひさそてまうでわめる。寺まふてみ

かさりもみ変化し給ひ、御まゝり、願ごくれ
なき給ふる、ある疑ともなりけり給へとひ
ものは、紫式部も、何らくかは御名はた
らて祈り申さん、御長人乃給のひと
まそ給ふ、御横さる里めぐ紀よりて、志
めし行ひ給ふよしう。まして其は海しく
の道すらく給ふはいとても我みとゝ一つま
あまくて給ひ思さ。但まよひふくさんや
て、みつけの御心とそうはかなく給ふ。志
うれあまてし、我のさまゆんしとぞれりけり。
清水寺ませさせりくされ。我世継ぎの

とゝけ。六角堂にてあり。先たゝくやまむ
まちうさ事終はけ。太山寺は山ふの
くらし始る事とかゝち。太神宮は
きうつさにはや者さ新とうかへ守治
与ていらんよきさんくとわもてもて。賀茂
も雲まけくのかなちうひとさて。春日
与て高の岸よ本の藤ちみとせ。浄土
我は限り杉寺そは言ゐとしへ。
信義与てかつさそこのゆきあひのきう
家もとろとき。小野は篁原のあそぬひてま
代あらし。播摩をなりぬよのうるさき

事とさめし。当帝孫を濃津瀬より
むちらかかりひとをすくみ。聴聞をかりひ
おてきよ我もまされしかもちてさり行へ
つまもて聖徳太子はかつく思もん議人々と
あわれくゝ。行基菩薩を真如らせ須弥
見行る事とよろこひ。伝教大師を
我立柏乃冥加祈。弘法大師まて
うるさやまふにてま座事終こえる慈
覚大師をおほつきる新羅明神とな
りゐん。慈恵僧正ていとも井乃歯より。
草のむしろとまきおひしよるとそ

しめさく。わしきさおほせ佛神。かゝる紀
権化。いろきり歌をよみ給ひたるも其の
せうかはしは。うたらんやしりうたえん給
ま。且はちりくさ法の事なれは。新古今
うたは撰されて給まへ。人皆知る事なるて
こうまて給ふそかし。百首の哥とさく
めもうきよ。念仏もんはしめよさしありく。
西行上人なきるもとは。何事を杼給
へいく世のたま思きてとも。歌くうかわし其
かつらぬ情よそあるよしとなん。熊野
の権現菩薩中にをあり給いさるも

たはより。いく哥のこ様にて。其のさる
しきさのゆふ月の比。はゐり西の山よ
へ入りあけるまふきとひひしは。今
まうけはかさらひ事をけ給わぬま。
このちはむらしのあまりて給へ人。為ま
うてきゝく。むかし今は事ともかうりし
給ゐてふつうの法為道んはいつる人。先
祖代々の風をそ受まれ。累葉の
儀を尽つりてよめは哥よ出来んと
座ましてうのたはくともあかり侍らん給し
うし。彼のは秘説もんうしう勝た。ずゆうし淳

つたはりける家まて絶まへはさくめて
根しらあらはれとさひ侍しかしにくり
くちみよりろくてやらふさき、今まて
是ひられ給へるよう、海しるのあやま
りしはおりひまかり侍ぬまといへよ、彼
侍あさわしく、堯舜孔子柳下恵の
おとくされみそわつつるましく、其の家
なれハとく、おなしはしもかしてりるへき
にあらは、又佛とてれまる法なれ、我身子
うしすへ亀しとて柳子中の宗の柳
るみとるもろりたまへさせ給へり、其のもの

ふるもの頃、内外の法をあれ共みちとはさて
うろ人、その儀をあやまりならすまれ給
事にて侍るは、歌の道とも歌の家よりか
うせん事、ちらしかましき事にて侍るか、加の
似る御門の御めくみ常のはん人まよく待
るはよ、これとそあそりて、これ世中乃
かうきはとりけ、中世ゐらみん事
り、世の中のならへきとをふにく侍るはくは
しく吉あやまるとも中かくし、さすに
略頌まてはいら侍給へ、又歌をよんと稀し
てん、とさまのしせん、心をさるかなしてん

すかりけりせよとて紫をまうされしくしく
葉とゝられまほし風情をりとめて風情
とりくめれど。姿をうしひてまことゝ寸
古風をうけて。古風とうけさはしく
みてなん侍りしか。すまいてしかはたか
くれはしけり。海とした紙をそしはかまの
しひ。そのれとはみをしいかみたえめしい
まことも見るきまつなつ解いかそつまに
うとまかとりまてハ侍るかき。道とさけり
るなのしい。夢とあしそめりとうちをうき
みて侍り。されひまて就道法寸みねか

しまわりし母。扇しゝやうしの紫よまとか、
へ給ひたる。集に入侍く侍るんよりも。
ちかうまやさしたる民。世くうりとて既侍よ
色しく。はつうへてりしく侍へとさみともあしくれ。
是まうへ道らんひとけよしうれさめ侍しめ。
かけさうの六義観音の御うちみ経によ。
しもかくりて侍りかぞみ心経のへうく。
御うち母よ奉さまへ忠さし。しまは。
くおみちらふの給へよ。観音まふ御
すゝめしやとおかく侍るいあいしくや
色ししく。かくりしまうるとるん。

きゆしうともかくるまゝへし

源氏論義序

源具顕

光源氏ハ式部か作りしておろけの
ことのはとうるわしすゝ世事りある人
ことさきけき物なれハいつはりすく事とも
みちめくし物に源字てまそ人ハ分なかハ篇
にをさしぬハしるまゝよなかく麻の輝とこく侮
てもいさとしハ名物ハつまゝこの作の世をわ
名ちうとをいまゝして正門とうさ肩し
君の冠称ともまゝしく相のしく名世称しく女の

中よもやちらけハ字れるのゐ此ゐくとを
なくさむらを源氏なりハ此物語ひろくひ
ろさ年のかしりわいてこよかうしきのれもし
世よりてなんにはさへてさみしこれか代
々ハ殿とやつかう時よるとひろまりとくる
もうまゝ人のあまかしてハ家門少補の秋
よりそれてれうゝ一条三条みうらゝれ代
りハ人のさうまふうしてもののくして
の作まさま人かゝふや、ちうさ世となりりて
ハ黄門将門の筆ことそわつゝかさゝし作ぬ
らなえうゝかりそう約とわりみ例をひさ待と

歌し。手とかんなとは。をしへのかたを
ひとつめしのしらまちしまるそ月日と
とゝり。そさまれにも姫りしのもとそしきなう
墨より盛く。白雲のはなく雲ひのかけ
まはつらしふはあつらまものつらしまる
色し。こゝろれのすよの網をみつよれ朝日なん。
かつらまとそのろうは。文字のゆつれはわまかく。
はらさらを海はれちとてみかきしひょして
見えなるしはう人も。まけなみか消えろう様子
のさゝ国むしてさかわ。ひとりしはみつとのよま
世の人のかわんこそ

（文藏野の言わてむさし野ともしまは
こ旅のよもほ衛とひしもやまと
といへはなる色し
そうけふたそやけしさきこそ
一見てまも文違来まれなう芳兵つらうす
やくそくまうつてわか身ともかれ
といへはなうへし
こけよいあけしろきこそ
紬あつて恋ちつしはほて去りなうし
折うらけ四季みこけつうれ
こけよき物てうるこそ

うき身よにやかて消なはたつねても
　草の原をはとはしとやおもふ
といへるなとも
いはゝ小き目なるひとつふたつ
霧ふかしんたくゆふつくなるか
　かみみなともかすくちかへん
ことはなる色なし
むけよくこゝろえなさく
ひとつなるものは(?)この田みね浦く
　涙ならいつくよそにこされぬまり
といへるなるへし

いはゝ世中をおさめそて人の心をおこなりに宮
ほとかありく物なるなそれきこしの歌は
いくらまたありもの家にむかれ妻な人
しもおこしなして有識のことありは妻す
たけふいくさすへたしりもあはれなりよ
まほそのかしめ給ふ人にかは色くかん
あるにより人のもとあら人て春の花は色ひ
姉は月のあけは字まくまちゆくて
こそひとゝ源氏ともこしなるくあら宮わ
わりき鶏と月つくそて御はまなれ恋けゆく
ひかりき月にの弱よいさなひてきる人あるか

なとこれかうへて　とかくすてゆきそ。やさし
くよろつれつまとしるう○たうきん。たゝの行ちの
こふかくもゝ。いさ川しくらうさ出入。入さのふり
かつ宇しく方伝うる見え。すつてひかりもたれた
のゝひころつにかまる。栄乃燈しけ常く。
月のおもかけとし月雲井にことにかはりかけ
さ。ちる花乃色もかの香もえかはらしかわり。
あすちる山の月のかけをとりあさつこなよまよ
て。あかれりしひとひそてを心をしたかふ。又春のあ
しかりし花のえんなと。秋乃夕すみちのかきと
ころかわいとまた見えしかつかたれ都伝かへて

とりてみんゆらふかきせをといつひ。中河の水よ。（イ元）
宗のなかまとのこりて風俗を詠しい。にほ
ふそこのみちけり人とえなまてあるきつさとう
しなひ。世をしるましをくとなしわ。
ほうる松山の浪とうけ。よき人の水はこ草とあ
たれさ。小篠の露とこしひ。霜のうさこまのさ
ねくれなまとなけきかつるとみちのさて
原はうれさ伝人りい見ひ。かとうち川をひさ
て世中とうつ見んさけかり。ふさ毎しありけ。
宗もあわりひ中ちしされしとかくさこくり宗
つましこゝ人ハ。濱代乃草かなと見そてうあまりひ

申しうけいよしへよをかくはさみて侍る中
にも堀川院の御時よりもとまてなきにけりと又
いはれけれは、これによりて藤原雅経なん源
氏のひしりなとなかりける、これを君も臣も
おほせけるなる事とそ、又藤原氏廉縁と申人さ
くり、あやしく源氏よりまへなりけり申さかりけ
家よりいまを小あめんしとかくいてもよしと
雅経のきこえりけりさむとかくしなん有
きとれ申さかりき
大蔵卿理髪の事　奉しけるひの事
やとよし

河原左大臣の例によりて随身を給はる事
きかん事
くはせなん日代はいつしかつかねかけ
きつし足を給ふ事
こうしてさとらくもとれ奉る人へ御行の
よれはきこし有家の事もくは奉りしけそかり
ける、これよりさらに源氏を抜して雑義
拵とまうけくらるふいよしへのしるしとも源氏
のみなとも奉る人は流にひとつまつそらとなるを
きこえあとも又ねをえさる不えぬ不あらひ
しなんめりかしの堀川院よりさらしき百

ら世しおほくかはり。世をしろしめしかはる
ことおほくありけりいまへのしるしも源氏と
もちゐる人あはれは。いまこのしるしをしるし。
つくしのくにへんといふ人となりてくんそれ
え入を。そのおりにしふひまうくしあち
お将長相と同類といひしそれとも。ことつ
いとよくかなしう。こと人にことよからふしかな
こそ。いさつかふぞみえしかれまし

月かけはいりそいまひろうきさらし

すしいつか事をりりのせしやうりあ

藤原の定家。そのむかしてし家その

わするなとさもかゝる花の色めつらしくあひ
みえてさふらふへし

吉祥天女　末摘花の御嘆

藤原為方はいとゝあはれにしてそのほか勇
しかへつまたならぬ人のよきときおもへらんう
たまし

女御更衣　蓬生の歎

菅原道綱は詞かをふしてもしめきとえ
まちつゝあひをいつゝ娘の月をみるかり。暁
の雲しかへ侍はなし

なかの院　かくらえ

藤原定成は、いよ〳〵伊行が流をたゞしう
なつぬいよ〳〵おぼしめすなるべし
忠仁公の例よりして、内覧を給ふと、大ねひら
つぎは随身より、殿上の節会くる事
をとゝの奥頭は、その家は中にいくたる
はじめ公人は、くら木の流をやもちひられ
とし
三えんとうき　設仕乃准擬
この時の人々は、その名こそゆかし野人より
をすゑの家をひとりあらむかしもまた
木の家にとりしはかりまでし、源氏との

おもひて、そのゆへをたづぬなかみへし。かのかし
いゐおもむきにくしてこゝの源、やしきの
のほりのくろうれし。ほつみこそのかき
のこゝやゐれなりしめしそくおそくしまして、
よろみえまうしくゐこしめれいとゐ、を
ありつことはてそれはしゐまうと源氏のら
とくもとゝれし。物語の趣しうとももなる
しめさんとて、弘安三年十月八日、従三位
藤原朝臣、前中将藤原朝臣中納言藤原為
臣、右少弁藤原朝臣ありし君せしまでて、源
氏のうらは、不審の問題としてまつりしめ

てなん。それか中にも仁徳の紀とひとしき。中なく
玉鈎の文とよめる人、明圓の后とうんたる人、命婦
賢の義とは準し、西宮の説とあまり待と
つきあてしいはいうし、忠世の後従と思ひ
わそ心奥の姫となしまうけそ。薄こそと
こゝらくの難義と論して、すかまへ給ふとし
てなかく源氏の論議とらそくことの
あひさき先生なる見てもさらに水此
おかれとさらく、麻のまことゝ成つりまれて。
といふ紙の説の所つなる中にもなく。雄
茂の為かゆとつてまつる。その恩とふこと

を此等よほひもくなりくしてむなしき
名のみ筆の海のすさひ中にとりこそて
れも、ろきん人のみそりおそろ、けさ物語
のんいそらかりへと、もふひく雲のくら
弁なく麻のおきふてぶもわくさうこの代
よおなりしくむまゝてくこの字この時りにゆ
へあとなんまろひめり。定家なくあわに
をれとくかんしの筆とまもてなの郡。真
ひさのいとして、は、ゆされの下並いらのかえ
らずして、すみ孫おくはさるま。筆れ
わてひさしくとまれは、源氏のこと紙

さり給殊の心ともえさせ給ん人は、あさましも
こゝ日ごろうちつゞきてよこのけはひよき
くらいまのかしこさとまうさるゝし

同誕

弘長三年
去にし十月廿二日、極楽の草葉ねすい　同
ちらそこなうしかくらう待遠しく言ひかく。
おもしろきとしもたゞはたまよりかゝ
るぞこしつめてかしこまり給ひける
てはいなくなりてなかのはかなりは。
つきいまゆゑうたわか方みかゆく思えと

山本のけれは山人とかくしつゝめでたう
いとしかるらうてくまらしゝかれども。
さりしそへ人なくまかりくる思ひまいらう
しかくともそ君よし入からうかん、前経
ともよりひとりよりつゝ頼て、たいらう
かくもくつき、つかりし給、なりうこさしつ給ひ
そ信の百き御てこてもわそ、むせにてあと
なまさしほいうとてそ、又たもしいつくゝ、かき
てとまゆうろけあうれゝふおもしき御
なひうんとうとく住まりめくまいしき
そうの御しもやなかまへいきゆうして次よ

かくと人見し

扶桑拾葉集巻第十二終

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan